
童話の世界のとある王国

原坂秋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

童話の世界のとある王国

【Nコード】

N5579P

【作者名】

原坂秋

【あらすじ】

魔女や妖精がいる世界。

そんな世界にあるリナール王国の第二王子キジュと、彼に仕える魔女リセミルの物語。

王妃様と手を組んで、キジュと彼の花嫁になる女性の運命的な出会いの場面を作ろうと必死なりセミル。

一方、彼女の努力を有難迷惑に感じながらも最終的に巻き込まれるキジュ。

王子様の相手は、必ずしもお姫様でないといけないの――？
お菓子のような、可愛くて重くない話を目指します。

王子様と魔女（前書き）

これも、書いてみたいなー、と考えていた内容でした。

童話って、可愛いイメージがあって好きです！

ラブコメにしたいと思っているのですが、ちゃんとコメディになっているか不安です。

感想等ありましたら、お気軽にどうぞ！

王子様と魔女

「勝った——!!」

座布団を十枚も重ねると、実は座っていられないくらいに揺れる。

そりゃね？煎餅布団なみに薄けりゃ話は別だけど。こんな無駄に厚い座布団だと、地震が起こったときの高層ビルが一番上みたい揺れる。

ぐらんぐらんと揺れすぎて——やば。酔った。

それに対して、私の目の前の王子様は座布団を一枚も敷かず直にフローリングに座ってる。

「王子って、ほんと、大貧民弱っちいですよねえ。また私勝っちゃって、もうつまないです」

「……その割には、いそいそクッションを積んでいるように見えるんけど。それと、大富豪のことを大貧民と呼ぶの止めなよ。貧相さがカードゲームの呼称にも現れてるみたいだ」

私と王子は、大貧民に興じていた。

今のところ王子は連敗中。

ふっ……。大貧民のリセミルと呼ばれた私の名は伊達じゃないってことよ！

「王子こそ、座布団のことクッションって呼ぶの止めてください。なーんで一々横文字で呼ぶんですか、西洋かぶれめ！」

王子は、柔らかく白くて綿がたくさん入っていて周りに可愛いフリルがついているもの——座布団を私に向かって投げてきた。これは立派な暴力ですよ。

「こんな座布団は、ない！」

「これが、座布団以外の何って言うんですか！」

「だからクッションだって!!」

「一緒じゃないですか、座布団もクッションも」「ちがーう!!そういうのイライラするんだよ。早急に正してほしい」

正すだなんて。まるで私が間違えているような言い方。

「どっちだっていいじゃないですかー。だから器が小さいって言われるんですよ私に」

「言ってるの君だけ。ああ、どうして僕は数いる魔女の中で君を選んだんだろう？」

大袈裟に嘆いてるけど……それは王妃様と私の母さんが知り合いだったからよねえ。

魔女や妖精の住む世界。

リナール王国は、そんな世界の小国だ。

本来魔女や妖精は森の中に住んでいたり、魔女協会で働いていたりするけど、中には王族や貴族に仕えている変わり種もいる。

私は魔女だ。

名前はリセミルⅡツアーネ。

私が仕えている———というと悔しいので、仕えてやっているのは、リナール王国の第二王子様。キジュⅡリナール王子。

十八歳にもなって婚約者もいなければ女っ気もない。私は少しだけ心配ですよ。変な性癖が身についてしまう前に、早く愛人でもいい

から異性と接する機会を作ってあげたい。

そう言ったら、「君も女の子でしょ」なんて言って！

私を喜ばせても何も出ませんよ！！王子が先日氣に入っていた洋菓子、また口に合えばいいんですけど！

ちなみに私は、フリーターよろしく実家でゴロゴロしていたら母さんに売られました。いや、「売られる」と表現するには、待遇のよすぎる職場だけど。

こんな、王族の魔女だなんて倍率の高い職場に、私なんか！給料はいいし、仕事は王子の相手をするだけなんで、正直ウハウハです。

でも、同僚の魔女は感じ悪いのよねー。高学歴ならぬ低学歴な私をあからさまに馬鹿にしちゃって。終わりよければという言葉を知らないの？

「もっと素直で可愛い子にすればよかった……」
なんていまさらなことを言っている王子に座布団を貸してあげることにする。さすがに王子を、床に座らせておくのは忍びないですから。

「座布団って呼ぶなら、一枚貸してあげてもいいですよ」

「……。その座布団はリナールの私物なんだけど」

契約成立ですね、王子。

座布団に座って、カードをシャッフルしながら王子はまだブツブツ言ってる。

「王子、そんなこと言ってないで、さっさと罰ゲームに移りますよ」

「え？ 罰ゲーム？ 聞いてないんだけど」

「言ってますんから」

いえ、心の中で言いましたよ？

だって、私が負けたら嫌じゃない。負けないとは思うけれど、万が一にも負けたら困るわ。

「簡単ですよ。王子の好きな人を教えてください」

「……はぁ……」

「ちよっ、何ですかその、「やっぱり来たよ」な顔は！！」

何故、私がそんな目で見られなければならない！

大体、王子くらいの年頃ならば顔の一つでも赤くすべきよ。何？その枯れきった老人のような反応は。

「君、最近そればかりじゃないか。好きな人は？気になる方は？初恋の話聞かせて下さい！——リセミル。君に年頃の女の子みたいな考え方は期待していないから言うけど……別に僕の女性関係が気になるわけじゃないんだろう？」

「気になりますよ。王妃様に聞いてくるよう言われていますし。……あ」

言っちゃった。

王子は座布団をポンポン殴って、舌打ちをした。

嫌ならさっさと婚約者を作ればいいのに。別にガマガエルのように醜いわけでも、小人のように身長が低いわけでもないんだから。なにより、お金持ちなんだから！

王子が身分を問わないと宣言すれば、この王城で働いている召使と同じ量の妃候補が現れるはずだわ。その暁には、整理券配分係として私は忙しくなるでしょうけど。それも面白そう。

「君は仕えている相手をちゃんと分かってるの？」

「もちろんですよー、王子が私の雇い主です」

正確に言えば主だけれど、私が王子に抱いているのは忠誠ではなく親しみ。

実際のところ私達庶民は、騎士団の人達のように王様を敬っていない。偉い人だっただけのは分かるんだけど、国王様だよ？いくらなんでも遠すぎる。主のためなら命でも！という信念を貫き通す騎士団には申し訳ないほど、私の中に王族への忠誠は少ない。

「でも、ほんと。王子も早々に良い人を見つけるべきです。毎日毎日、魔女と大貧民するなんて……暗すぎです」

ニートも真っ青な地味な一日だ。

変に権力があるので誰も言わないが皆、王子の将来を憂いているんじゃないだろうか。

「失敬な。大体、その魔女が何を言うか」

「私はいんです。だって暗くないから！ずっと言わないようにしていたんですけど、いい機会だから言っちゃいます。王妃様が乗り気な今、美しい恋人を作っちゃいましょう！」

そしてめくるめくハッピーライフをエンジョイして下さい！

「えー……。母上が？かなりの不安要素が……」

「王子は優柔不断だから、王妃様くらいの押しの強さがちょうどいいんです」

じゃあ私、王妃様に報告に行ってきますねー。

「つて、ぐわっ!？」

サツと高く積まれた座布団を掴み、グラグラと揺らしたのは王子だ。いつもでは考えられない機敏な動き。いつもこんくらい即断即決すりゃあいいのに。

「わ、ちょっ、おう……っ」

「君を母上のもとになんか遣ったら、ろくなことにならないから！行くのなら、僕が行くから。君はここにいて」

ええー。私だけ蚊帳の外ですかぁ？

イジメですよ、イジメ。

「世間で言うセクハラです……」

「漏れてる漏れてる。そしてセクハラじゃなくて言うのならパワハラだから！いつ僕が君に性的な嫌がらせをした！？」

「まあ王子、こんな純粋な少女に向かって何という事を……そして、パワハラだということは認めるんですね」

「パワハラもしてない。そもそも君、僕の言うこと聞かないじゃないか」

「そんなことはないです。友による、友のための行動じゃないですか。親の心子知らずと言いますが……」

「君は僕の親気分か。図々しい」

王子は呆れた声を出して、念入りに私にここにいるように言う部屋を出た。

もちろん——私も後に続いた。

王子様と魔女（後書き）

あまりリセミルが魔女っぽくないですが、次回以降から魔法が入ると思います。きつと。

眠りの森の公爵令嬢（1）（前書き）

少しギャグ色が濃くなったかな？と思います。特に前半。

眠りの森の公爵令嬢（1）

王妃様は、本当にキジユ王子のお母様かと思うほど明るい方。私の母さんの友人でもあるんだけど、私とも気が合うの。特に、本の趣味が！

「眠りの森の美少女」を愛読している人を、私は自分以外で初めて見た。

あ、「眠りの森の美少女」って、恋愛小説よ。今は絶版なんだけど。物語は、とある国の王女様に王子様が一目惚れするところから始まるの。

王女様も王子様もとても美しくて、二人はすぐに惹かれあう。そんなとき、王子様に恋情を抱いた悪い魔女が王女様を誘拐するのだ。魔女は王女様に永遠の眠りの魔法をかけて王子様に言い寄るが、王子様は魔女を拒んで王女様を探しに行く。

王子様のもとに白い鳥が飛んでくるのは、彼が王女様のことを想った時だった。鳥は王子様を王女様の眠る塔に導き、王子様は愛しの王女様と再開を果たす。

ここがクライマックスなの！

その後、王子様は眠る王女様を見つけ——吸い込まれるようにその唇に口づけた。

すると、王女様は目を覚まし、二人は永遠の愛を誓って結婚する……。

母さんを通して私と王妃様が会った時。めったにお目にかかれない同族に私達は狂喜し、朝まで語り合った。

母さんは先に帰った。

『キャー!!! いい、いい! 理想の愛!』

『本当に! わたくしも、陛下とそんな出会いをしたかったわあ!』

『王妃様はどの場面が好きですか?』

『わたくしは、白い鳥が王子様のもとに飛んできたところだわ……』

『いいですね、いいですね!! 文庫版、二百三十七ページですね!』

? 私は王子様が王女様を想って一筋の涙を流すシーンが痺れます!』

『まあまあ、単行本百九ページ!』

魔女と人の共存が法律で確定されてから、魔女が悪役として登場している本は全て回収されて絶版になった。

魔女仲間の中で「眠りの森の美少女」を読んでいるのは私だけだったわ。

母さんも、魔女が悪役なのは不愉快だと怒っていたけど。別にいいじゃないの。どうせ物語なんだから。

『王妃様は、イラストレーターはどっち派ですか?』

単行本と文庫本で、イラストレーターは異なるのである。

『わたくし? うーん……ミスター・Mね。ああでも……王女様は、ミス・Lのほうが美しいかしら。だって、ミスター・Mのほうは描写に比べて大人すぎるもの』

『全くの同感です!』

私が王妃様と初めて会ったのは、私が王子に仕えることが決まった後だった。

『もう、リセミルちゃん! わたくし、こんなに楽しかったのは初めてよ!』

『私もです!』

『リセミルちゃんにだけ言うけれど、わたくし、息子と息子の花嫁

の出会いはこの風がいいな……と思っているの』
素敵です！！素敵です王妃様！

だから私は、王妃様と誓ったのだ。

キジュ王子と王子の花嫁になる女性との出会いは、（私達にとって）
素晴らしいものにしよう、と！

王子の幸せを願う気持ちよりも、「眠りの森の美少女」みたいにロ
マンチックな出会いを生で見たいという気持ちが大きかったけ
れど。

絶対的な権力を持つ王妃様と、魔法を使う私。私達が手を組めば、
まさに鬼に金棒よ！

王妃様の魔女は、本当にいかにも魔女です、って感じのお婆さん。
協力を仰いだことも会ったけど、軽く無視された。

「母上」

王妃様の私室に、王子が入っていった。扉を薄く開けると、王妃様
と目があった。パチンとウインクされ、少し照れちゃいましたよ。

「あらー？どうしたのキジュ。いつもリセミルちゃんと二人きりで
過ごしているのに」

「変な言い方をしないで下さい……」

「嫌ねえ、もっと照れなさいよ」

「何故ですか」

王子の顔は見えないけど。きっとげんなりした顔してんでしょね。

「で、本当に何の用？わたくしこれから、陛下とお茶会をするのよ。
手短に済ませなさいね」

「用？——用？」

「そういや、なんで王子は王妃様の部屋に来たのかしら。ノリ？」

「王子も分らなかったらしい。用？用？と必死に頭を回転させて、」

「そ、そうだ。母上、リセミルに余計なことを言うのは止めていた
だきたい。どうでもいいでしょう、僕の恋愛なんて！」

「えー？だって、リセミルちゃんと約束したのよ。キジュにロマン
チックな出会いをしてもらいましょうね、って！」「眠りの森の美少
女」が如く！」

「眠り……？」

「ねえ、男色なんて噂が立つ前に、一人や二人、恋人作っておきな
さいな」

「だ、男色……！？」

「さすが王妃様。私が言えなかったことまでビシッと言ってくれる。
そうよ！十八にもなって女性関係が一切ないなんて、異常なんだか
ら！普通だったら、結婚しててもいいのに。」

「あ、兄上の方はどうなんですか。兄上はもう二十歳。浮いた噂は
多々ありますが、婚約してませんよ」

「王子……グードス様を売ったわね。」

「グードス様というのは、キジュ王子のお兄様、王太子殿下のこと。」

「グードスはいいのよ。もう諦めたから」

「王妃様もさらりと酷いことを言う！」

確かに、「眠りの森の美少女」の王子様の年齢を考えれば、グード
ス様よりもキジュ王子のほうが理想だけど。

「じゃあ、キジュ。どんな子が好みなの。面白がってリセミルちゃ
んに話したりしないから、言ってみなさいな。まさか本当に男性が
好きなわけではないのでしょうか？」

「王子は分かりやすく乗り気でなかったみたいだけど、王妃様が最後

に言ったことに反発して「もちろんです！」と言い返した。

「どんな子？どんな子が好きなの！？キジュにも好みのタイプなんて、あったのねえ！」

王妃様は興味津々なのを隠そうともしない。私だって来になるところだ。

今、私と王妃様の計画のヒロインのタイプが発表されるんだから……！

「……えーと……」

「……」

「うーん……」

「……やっぱり、女の子は好きじゃないの？」

そうなのか！？

私は扉の前で頭を抱えた。

いくら出会いがロマンにあふれていても、それが男と男だったらただ暑苦しいだけだ。なにより私、BL無理なんだよ……。

「違いますよ！どうして母上はそっちに結び付けたがるんですかっ！」

「だってえ」

「だってじゃないですよ」

「じゃあじゃあ、わたくしが例えを言うから、それが好みかどうか答えてちょうだいね」

王妃様は強かった。何がって、精神的な何かが。

「何故……」

「だって女の子好きなんでしょう」

「なんか、ニュアンスが……」

「ふふん、黙らっしゃい。言うわよ。はい、その一、リセミルちゃんみたいな黒髪！」

私ってか、魔女は皆黒髪ですよ。

「好みじゃないです」

「はいその二、リセミルちゃんみたいな黒目！」

魔女は皆黒目です。

「好みじゃない」

「その三！リセミルちゃんみたいに元気で可愛くて明るい！」

「好みじゃない！」

……。てことは、髪と瞳は黒以外で、病弱でブスで暗い子が好きなの？

王子って……。

一気に王子が遠い人になった。

「じゃあまとめると、リセミルちゃんとは正反対の子、ってことかしら」

「何で基準がリセミルなんですか」

「だって、可愛いじゃない」

「理由になってませんよ」

王妃様はふふん、と笑った。

「そうね、ツリーベル公爵令嬢ってどこかしら。儂げで、大人しくて、美しい。キジュ、どう？」

なるほどねー。可愛いのが反対を美しい、なんて。さすが！

「は？ツリーベル公爵令嬢？……そうですね。あの人はリセミルと真逆——」

来た、きた、キタ——！

バチッと王妃様と私は目を合わせると、頷きあった。

「リセミルちゃん、ゴー——！」

「アイアイサー！」

「……え？」

王子はゆっくりと首を捻り、ガッツポーズをしている私を見、それ

から王妃様を見て真っ青になった。

「リセミル、待っててって言ったのに――」

「ツリーベル公爵令嬢、了解です！」

「あ、こら、待った！」

私が二人に背を向けて走り出すと、後ろから私を追う王子の足音が聞こえてくる。

足の長さでも運動神経でも、私は絶対に負けている。基本的に魔女は運動できないから。

でも、私達には魔法がある。

「アルトー！」

私は窓から飛び降りると（ここは一階です）、今まさに飛び立とうとしている同僚の名を叫んだ。

「――リセミル？」

「乗せて！」

アルトの後ろで箒を跨ぐ。

「はい、飛んで！」

後ろの、そう遠くない距離に王子がいる。こっちに向かって走ってる！

「なんだ？ キジュ王子……？」

「いいから、早く飛んで！」

「だが……」

「飛べって……！」

なかなか飛び立とうとしない同僚に、私はポケットから銅貨を出して見せた。そのまま彼の服のポケットに入れる。

「ほら、飛びなさいよ」

「――毎度――」

アルトが長い足で地面を蹴ると、箒はふわりと宙に浮いたのだった。
「行き先は？」

「ツリーベル公爵領」

今の時期、貴族はカントリーハウスに引っ込んでる。だから、行くとしたら彼らの領地。

待ってて下さい、王子、王妃様。

キジュ王子と公爵令嬢の、奇跡的で、かつロマンチックな出会いを作ってみせます！

眠りの森の公爵令嬢（1）（後書き）

ちなみにリセミルの容姿としては、十点満点で言うところと六点くらいです。

王妃様は女性に優しいタイプなんです。

眠りの森の公爵令嬢（2）（前書き）

ヒーロー（王子）出番がないです。

最後の方に、サブタイトルにもなっている公爵令嬢が登場しました！

眠りの森の公爵令嬢(2)

空を飛ぶのには、メリットとデメリットがある、と私は思う。

メリットはもちろん、速度が早いことと、どこからでも飛び立てること。

そしてデメリットは。

「は、は、びゃくしょーい!!」

寒いよ!!とても!!夏以外は。

「うお!」

寒さでくしゃみをする、前に乗っていたアルトは悲鳴を上げた。

「おい、リセミル!オレの服に付けてないだろうな!」

「のーぷろぶれむ。平気よ」

「……英語くらいちゃんとカタカナで発音してくれ」

「今はちよつと頭が足りないくらいなのがモテるのよ!」

前に座るアルトは、リナル王国の王族に仕える魔女の中では私の次に若い。そして私とは違って有能で高学歴。

たしか、王太子グードス様に仕えてるんだっけ。「……ブスで馬鹿はうざいぞ」

「え、なになに?誰のこと?」

「……」

空って、寒いよ。本当に!

だから、会話でもしてなきゃ倒れそう……。

「あのさーアルト。背中に鼻水ついてても、アルトって美形だと思うよ」

「は!?!おい、付けたのか!?!」

「うっそーん」

「どっちだよ！ついたんならクリーニング代払えよ！」
大丈夫。ちよつとだけだから、すぐ乾くよ、きつと。

魔法は、使い手の気持ちが左右される。

アルトの気持ちに比例して、箒は前に後ろに左右に斜めに……。

「――吐きそう」

「はああ！？」

「うぐ……」

「そ、そういうえば、昔聞いたぞ！？リセミルは乗り物酔いが酷くて箒に乗れないって……」

乗れないわけじゃないさ。乗らないだけで。というか、箒の揺れは嵐の中の船がごとく酷い。

「う……うえ」

「ぎゃああああ！降りろー！！落ちろー！！」

「落とされてたまるか！うっ……」

真っ青になりながらも私はアルトにしがみつき、私達はようやくツリーベル公爵領上空に到着した。

アルトは私以上に到着を喜んでくれた。ふふ、意外とイイ奴じゃない。

「けっこう遠くまで来たけど……、お前帰れるのか？」

ゆっくりと下降しながら、アルトが言う。内容の割に、アルトの声に私を気遣う色はない。

「んー。汽車を使う」

「汽車あ？情けない。魔女としてプライドはないのか！」

「……と言われてもねえ。私自分の運転で酔うんだもん」

「情けない……！」

悪かったわね!!

ギロリと睨むと、アルトは深い深いため息を吐いた。

地面に足がつく。ずっと飛んでいたせいで私はふらついてたけど、さすがエリートは違うわね。顔色一つ変えてない。

「……って、なんでアンタも降りてんの？」

「今日非番で暇なんだよ。付き合う」

「いやいやいや、結構。付き合っていないわよ!？」

私の本気の拒否も聞かずに、アルトは箒を手にもって私に微笑んだ。

「遠慮すんなって」

「してないわ!!」

「いや、本当にね。遠慮とかじゃなくて、真面目に嫌なんですけど」

「オレも暇なの嫌なんです」

休日出勤しなよ!

いくら文句を言ってもものらりくらりとかわされて、魔法で逃げ出しても一瞬で魔法で捕まって。

ツリーベル公爵邸に向かう時には、私の魔女としての自信と体力はゼロになっていた。

ロマンスを求める乙女心と王妃様との約束が今の私を支えてる!

「で、ツリーベル公爵の家に行つてなにすんの？」

「令嬢をさらう」

私が真顔で返すと、アルトは奇妙な間を置いてからゴホンと咳ばらいをした。

「……で、ツリーベル公爵の家に行つて……」

「だーかーら、令嬢をさらうって言つてんでしょ!ここまで来たんだから、協力の一つや二つしてくれんでしょうね!」

さらうって言うか、連れ去る?

そう、私は酔いに耐えながら、ツリーベル公爵令嬢と王子を主人公

にした、「眠りの森の美少女」を考えていたのよ。

「じゃあアルト、私の作戦を言うから。アンタも協力すんのよ」

まず、私が令嬢をさらう。

で、ツリーベル公爵領にある王妃様の別邸に運ぶ。

私が王子に手紙を送って王子にここに来てもらって、王子はここで令嬢と会って一目惚れする。で、眠る令嬢にキスをして令嬢が起き上がって、令嬢も王子に一目惚れして――。

「晴れて、王子は妻子持ち！」

「え、子も？」

思わずと言ったふうにアルトは口を挟み、

「なんて頭の悪そうな計画なんだ……」
と足を止めた。

「完璧でしょ。拍手してもいいわよ」

「最初からしておかしいだろ！」

最初って、令嬢をさらうところよね。

「ホワイ？何故？」

「なんでナチュラルに犯罪行為してんだよ」

「だって、令嬢が自宅で寝てたら普通じゃない」
下手したら王子が訴えられるわ。

それに、結果オーライって言うじゃない。終わりよければ全て良し！

「まあそれは――って、駄目だから！国に仕えるオレ達が共謀して令嬢さらうのは駄目だろ」

おお、ナイスノリツツコミ。

「だってえ」

「そんなキモい声だしても駄目だから」

失敬な！私は可愛い声を出したのよ！

「しかも何だよ、その二人そろって一目惚れって」

「一目惚れは王道でしょ。ベタだけど外せない」

「同時に一目惚れなんかするか、馬鹿。一目惚れナメんなよ!？」
迫力負けして、仕方なく私は頷いた。

「じゃ、じゃあ協力してくれるのね」

私達は睨み合い——目力は私が勝った。

海よりも深いため息をついて、アルトは前髪をかき上げた。イケてるかとも思ってるのかしら。

「しゃーない。お前の言うツリーベル公爵令嬢って、ジュジュ嬢のことだろ？」

「名前は知らないけど」

「名前も知らんのに誘拐計画立てたのか！」

「そうですけど何か」

「……別に」

開き直りって、良い言葉よね。

そう、都合の悪いときは開き直ればいいのよ……!

「ジュジュ嬢なら、グードス殿下と親交があったはずだ。殿下の名を出せば、外に出すことができるだろ。一応オレの顔も知ってるだろうし」

「グードス様って、女たらしだもんね」

どここの令嬢と出掛ける、という話は頻繁に聞くのに、婚約とか結婚とかの話は全く聞かない。

きつと遊び人なのよ。

その遊び人心を少しでも王子（キジュ王子の方ね）に分けてもらいたい。

「女性のご友人が人より多いだけだ！実際、あの方はまだ女性と手を繋いだことも……」

アルトがどーでもいいことをグチグチとぼやいていると、カサツと草を踏む音がした。私達は立ち止まっているから、私とアルト以外

の第三者――。

「あら……？グードス殿下の魔女さん？」

耳障りに高い声（若い子によくいるさー、どこから出してんのよ、って感じの声！）がして、私とアルトはそちらを見る。

「あ、ジュジュ嬢」

そこに立っていたのは、フリフリの、フリルやらレースやらが必要過多に付けられたドレスをきた少女だった。

この子がツリーベル公爵令嬢？

――イメージと違うんですけど。

なんかちがーう、と感じながらも、私は引きつった笑みを浮かべて少女に近づいたのだった。

眠りの森の公爵令嬢（2）（後書き）

次には王子……出るかなー？という感じです。

基本的に王子の目を盗んで魔女が出会いを作るので、王子は被害に遭いつつも出番が多くないという可哀相な感じになりそうですね。

眠りの森の公爵令嬢（3）（前書き）

眠りのゝは今回で一応終わりですね。

眠りの森の公爵令嬢(3)

リナール王国王城。

「あああ」

頭を抱える第二王子に、王妃はさも楽しそうに笑った。

「おほほほ」

アルトとリセミルが飛び立ち、キジュが肩を落として戻ってきた時も、王妃はこんな風に笑った。

「母上……かなり余計なことをしてくれましたね……」

「だって、お前を見ていると面白いのだもの」

「……面白くありません……」

ボソボソと反論するキジュ。王妃は目を細める。

「良かったわねえ。リセミルちゃんにばれなくて」

「え？ ああ、それは……まあ。あれだけ気配を発していたら誰だって気付きますよ。貴女の気味の悪いウインクでも……あだだだだ！ 細いヒールで足を踏まれた。」

「言っても良かったじゃない。黒髪で黒目でなくても、リセミルちゃんがどストライクです！ って」

「言うわけないでしょ。そんなこと言ったら、リセミルが調子乗るじゃないですか」

予想外の理由に、王妃はキョトンとした。

「ダメなの？ 調子に乗ったって別に——」

「リセミルが調子に乗ると、イラッとするんです」

「……ふうん」

どうでもいいわ、という顔を隠しもせずに、王妃。

「そういえば、父上との茶会はどうしました？」

「キジュとお話するほうが楽しそうだなと思って。断っちゃった！ 」「キジュは頬を引きつらせて、声にならない悲鳴を上げた。」

「ねえ、本当にツリーベル公爵令嬢とキジュの運命的な出会いを作るつもりかしら、リセミルちゃん」

「——いや、ないでしょう。母上の言った病弱な〜って、リラ嬢のことですよ？あの方はまだ十歳です」

「でも、長女のジュジュさんは十七歳よ。勘違いしてたりして」

あああ——！！と王城にキジュ王子の悲鳴が響き渡り、お茶会を断られてふて腐れた国王がキジュに八つ当たりをしたことを、リセミルは知らない。

「貴女がツリーベル公爵令嬢ですか？」

私は、私が一番可愛いと自負している笑顔でジュジュ嬢に近寄った。ジュジュ嬢は——その。少女趣味？

ああいうのが王子の好みなのかしら！？それとも、一般の男性の意見！？

「ええそうよ。あたしがツリーベル公爵令嬢ジュジュです。うふふ、可愛い名前でしょ？パパって趣味悪いけど、あたしの名前だけはありがとうって感じなの！」

どんな感じだよ。

そう言いたいのを我慢して、私は彼女に合わせてふふふ、と笑った。「本当。可愛いお名前ですねえ。私はリセミルっていう名前なんですけど——」

「ふん、変な名前」

「な……っ！」

ムカつく。ムカつく——！

あんた、王子の好みじゃなかったら殴り掛かってたわよ！

「抑えろ、抑えろ。普段はあんなのじゃないんだがな」

アルトが止めてくるけど、止めるなら向こうを止めなさいよ——！！

つまり、あれですか。

男の子の前ではかわいいこぶるけど、女の前では本性剥き出しっぺう。

王子ー、貴方、騙されてますよお！絶対！

「——ジュジュ様。実は、グードス殿下が、」

「あら、グードス殿下がいらっしやるのですか？そういう大事なことは、先に言って下さいな」

アルトに満面の笑みを向けるジュジュ嬢。

「それにしても……相変わらず魔女さんは格好いいですわね」
うっとりとした顔で、ジュジュ嬢はアルトを見た。

「ありがとうございます。ジュジュ様もお美しい限りです」

「まあ」

ものすごーく取り残された感じがして、私はアルトの脇腹を肘でどついた。

「ぐっ!？」

「まあ、なんて野蛮な女なんでしょう」

野蛮で悪かったわね！

「さっさと連れて行くわよ」

「……ほんとにやるのか？」

「当たり前よ！私がここまで耐えてるんだから！」

アルトはクルリとジュジュ嬢に向き直った。

「ジュジュ様。実は、グードス様はお怪我をされてしまいました。

どうしてもジュジュ様にお会いしたいとおっしゃるので、迎えに参ったのですが……」

「まあ、お怪我を！か、顔に傷はついてないでしょうね!？」

予想以上の食いつきに、アルトは若干引きつつ、「捻挫です」と無難な怪我名を出した。

「まあ、良かったわ」

「……良いのか？」

「あらリセミルさん。何かおっしゃって？」

「い、いえ何も」

ジュジュ嬢、怖い。

王妃様の別邸にいる、と言ったら、ジュジュ嬢はルンルンと私達の前を歩きはじめた。段々後悔しているアルトと、疲労困憊している私はその後が続く。

「ほ、本当に王妃様の別邸あるんだ……」

「まさか知らなかったのか？」

「イエース」

「——もう帰りたい」

ジュジュ嬢の足取りが軽いほど、私達の足取りは重い。

私、ジュジュ嬢に仕えるのはちょっと……。いや、ちょっとどころでなく嫌だ！

私が疲れて疲れて、肩で息をし始めた頃。息を乱さずに、ジュジュ嬢はある城の前で足を止めた。森の中にある、魔女の私でさえ入るのに躊躇してしまう薄気味悪い小さな城だ。

「……………」

「ここに、グードス様がいらっしゃるのね。キャー！！会いたいだなんて、会いたいだなんて！！あたしもですわ！」

「……………」

怯まないジュジュ嬢を見直しました。私とアルトは言葉も出ないわ。

「さ、行きましょう、魔女さん」

「ま、待って下さい。私も行きます！」

「あーら、リセミルさんは来なくてもいいわよ」
ムカつく……！

リセミルⅡツアーネプレゼンツなんだからね！！

カツカツとヒールの音を響かせて、ジュジュ嬢は歩く。

「どこにいらっしゃるのですか？」

「え？ えーと、えーと……、どこだったかなリセミル？」

「——二階の、一番手前の部屋で」

王子様は、絶対に階段を上るのよ。「眠りの森の美少女」でもそうだった！

ハイテンションで階段を上がり、「グードス様あ！」と甲高い声を上げながら扉を開ける。

「あら？」

けど、そこには誰もいない。

ははは、あれ？って顔してる。

ざまーみろ！

「おい。お前、今かなり悪役な顔してたぞ」

「え、本当？」

ま、まあ、魔女は悪役だものね。別にいいのよそれくらい。

私はジュジュ嬢に近寄った。

ジュジュ嬢は騙されたことに気付いたのか、顔を真っ赤にして私達を睨む。

「騙したのね！」

「すいませーん」

「キーツ！」

ハンカチがあつたら、裂きそうね。

——ああ、そうだ。早く眠らせないと。

口づけで目覚める魔法をかけるなら、眠らせるときにも口づけなければ。

いや、頬にね？私が唇にキスしたら色々問題よ。アルトという友達を手放すことになりそうだし。

素早く頬にキスすると、ジュジュ嬢はカチッと固まった。魔法のせいじゃないと思う。

「——眠って」

耳元で囁いたら、ジュジュ嬢は力を抜いてその場に倒れ込んだ。絨毯が敷いてあるから、怪我はないと思うけど。

ジュジュ嬢も、黙って寝てたら美人なのに。長い金髪なんか、ヒロ

インとして大事なところを掴んでるわ。

アルトがジュジュ嬢をベッドに運び、眠っているか確認した。

「ん。眠ってる。はは、本当にキスするとはねえ」

「頬に、ね。誤解を招くこと言わないでよ」

私はポケットから紙を出して、王子に手紙を書いた。字は、母さんから習っているから書けるの。

「王子へ。ツリーベル公爵領の、王妃様の城に来てください……。と。よし」

ファンシーな花柄のカーテンを引いて、二つに折り曲げた紙を投げる。すると、二つに折った紙は蝶々の羽になった。

パタパタとあっちにうろうろ、こっちにうろうろ……。

「王子のところよろしくねー」

パタパタ、パタパタ……

「イライラする」

優雅に飛ぶ白い蝶々を睨んだかと思うと、アルトがいきなり窓から手を伸ばして蝶々をつかみ取った。

「あー！なんてことを！」

「もっと早いやつにしろよ！」

そう言って再びアルトが紙を投げると、今度はカラスになってバツサバツサと飛んで行った。

「……悪趣味ね」

「——うるさい！」

しばらくの間、私達は城の中にいた。

最初のほうは話とかもしてたけど、最終的には話題もなくなり、黙って窓から外を見てたりしてた。

「おーそーいー！暇！」

我慢も限界がきて、私は壁を叩いた。

「仕方ないだろ。それより、王妃様の城なんてあやふやな言い方で、伝わるのか？」

……。え。もしかして王子、知らないの？

「今さら言わないでよ！」

「え本当に！？冗談だったんだが！」

がああん、と私が体育座りしていると、突然アルトが立ち上がった。
「あ」

「なに？テレパシー来た？」

もしくはトイレ？くらいの軽さで聞くと、アルトは真剣な顔をしていた。

「誰が入ってきたぞ。城に」

「何で分かんのか？」

「気配がするだろ」

しないけど。

あんたは忍者か！

——とは言え、私よりも有能な魔女を疑う気もなく。私は、階下に向かうアルトについていった。

「……って！何故にグードス様！？」

「あ。殿下」

顔だけは良い王太子。

どちらかと言うと女顔の王子に、その凛々しさ分けてあげなよ、と言いたくなる王太子！

王子と兄弟だと実感できるのは、その金髪だけだよね、って感じの王太子！！

「やはりお前か。リセミル……」

私とグードス様は、同じくらい相手の出現に辟易していました。

「カラスが来たから、アルトだけかと期待していたのに」

「……。カラスが来た？アルトお？」

睨んだものを石に変えると言われているメドゥーサを意識してアルトを睨みつけると、ヤツは乾いた笑いをもらした。

「はは……間違えた」

「間違えて済むかい、馬鹿ー！」

私が呼びたかったのは、王子なのよー！キジュ王子！

「私が王子って言ったらキジュ王子のことに決まってるでしょー！」

「だから間違えたつつただろ！」

漫画だったら、バチバチと火花が散ってたと思う。

「……はあ。せっかく暗号を解読してここまで来たんだ。休んでいく」

グードス様は、自分が間違えて呼び出されたことに気付いたようだった。

「暗号？お前、暗号なんか書いたのか？」

手紙のことかしら。暗号なんて書いてないけど。

「……書いてないわよ」

「字が汚すぎて、読めん」

ぷちっとかかが切れて私はグードス様につかみ掛かったけど、呆気なくアルトが私を捕まえて、私の仕返しは失敗に終わった。

……しやーない。

「私が呼んできます」

「どうやって？」

私の提案に、間髪入れずに聞いてきたのはアルトだった。

「……箒で」

「乗れないだろ」

失敬な。乗れるわよ。

私は二階に戻り、立てかけてあったアルトの箒を掴むと失礼な男二人組のところに戻っていった。「乗らないだけで乗れるわよ！」

「それ俺の——」

「うっさい！」

城から飛び出して、私は箒に跨がった。

「絶対に二階に行かせないでよ！」

そう言って、私は地面を蹴る。

五分で、気持ち悪くなった。胃酸が逆流……ということはないけど、鏡を見たら私は真っ青になっていることだろう。急ぐと、急いだぶんだけ目が回って浮遊感に気分が悪くなる。

なるべく高度を落とそうと地面に近寄ると、「リセミルー！」と名を呼ばれた。

「あ。王子」

そこは、王都の隣の領地だった。とにかく田舎で、田畑しかないようなところ。

だから王子は私を見つけて、私は王子を見つけられたんだと思う。フラフラになりながら王子の近くに降りると、予想通り私は倒れ込んだ。

「リセミルー!？」

「大丈夫です、王子。心配してくれるよりも水を下さい……」

「み、水？ほら」

渡された水を飲み干して、私はそのまま道に転がっていた。

大丈夫、こんな田舎。人通りなんて一日に一人通れば多いほうだし。

「そう、通っても馬くらいしか——って、馬!」

王子の乗っていた黒い馬がーっ。私の髪を食べようとした!

「王子!なんで黒い馬なんですか、乗るのなら白馬にしてください」

「母上にも言われたよ。だから裏について黒にしたんだけど」

裏をつく必要、ある?

ひねくれていますね、と皮肉の一つでも言いたいけど生憎、私にそんな体力は残されていないかった。

目が回る……。

「王子、ツリーベル公爵領に向かって下さい。王子のヒロインがスタンバってます!」

「……リラ嬢が?」

「いえ、ジュジュ嬢が!」

「やっぱり」

王子は土や砂だらけの私を抱き上げると、馬に乗せた。かなり高く
て、生き物特有の先が読めない動きをして——酔う。

「じゃあ帰ろうか」

後ろから、私が持っていた箒を持って王子が乗ってくる。

Uターンしてるんですけど。

「いやいやいや。帰っちゃダメですよ！？アルトもグードス様も王
子を待ってますから！あの生意気なヒロインも！」

「ああ知ってるよ。兄上に君の字を見せつけられたからね。きっと
僕のことを呼んだんじゃないかと思ってるのんびりとそちらに向かっ
てたんだ」

でも、箒がないとアルト戻れないだろうしねえ。まあ、汽車に乗れ
ばいいんだけどさー。

「王子。王子がキスしないと、ジュジュ嬢は目覚めないですよ！
王子様は魔女を振ってから王女様——じゃなかった。ジュジュ嬢を
助けに行くんです！ロマンスなんですよ！」

うっとり……。見たいわー。実写版の「眠りの森の美少女」。

「君を振って？」

まさか。なんで告白もしていないのに私が振られなくてはいけない
んですか。

「私じゃないですよ。王子様に言い寄る悪い魔女です。まあ今回は、
不承不承ですが私が引き受けてもいいですけど」

「君を振って、ねえ」

馬は走るわけではなく、パッカパッカと歩いている。王子が綱を引
くと、ゆっくりと後ろを向いて歩きだした。つまり、ツリーベル公
爵領に。

「……もつとスピード出ないんですか？」

「出るけど、そうしたら君酔うでしょ」

酔いますけどー、この微妙な速度も十分に気持ち悪いです。

「じゃあ、私先に行ってますから、王子は後から来て下さい。全速

力で」

王子から箒を取り返そうとしたら避けられて、後ろから腕を回された。

「じゃあ飛ばすから、落ちないでね」

「へ？……ひい！」

箒だと、空じゃない。ぶつかるものが少ないのよね。あってもカラスとか、高い塔とか。どんな乱暴な運転しても、接触事故の心配は少ないのよ。

でも馬は違った。私は馬を信じきれなかった……！

王子は馬のことを信じているのか、それとも慣れているのか、全然恐がってなかったけど。

しつこいようだけど、馬って生き物じゃない！奴らの気分次第では大怪我するかもしれないのよ！？

——私は馬が苦手になりました。

「ほら着いた」

と言われた時、私は失神してた。完全に後ろの王子に寄り掛かって、放心状態だった。

「リセミル？」

「……はっ！」

気付いたら、ツリーベル公爵領でした☆

「途中から寝てたでしょ」

いえ……気絶してました。

それとも、私の名誉のためにも同意すべきかしら。

「ははは……」

日は暮れていないけど、私が出てからけっこう経つ。早くしなければ。

「王子、運命の城はあっちです！」

私が名付けました。運命の城！

少し速度を落としてパッカパッカと走っていると、歩いた時の時間の速度で到着した。

「よし。行きましょうヒロインの元へ！」

「はあ」

気乗りしなさそうな王子を引っ張って行けば、アルトが沈黙そうな顔で立っていた。

「アルト。邪魔」

「リセミル……すまない……申し訳ありません、キジュ王子」

「は？」

ごめんなさいごめんなさいと何度も謝り、けれどアルトは私達を中に通そうとしない。

「謝らないで、どきなさいよ」

「怒るなよ」

「場合によっては激怒するわ」

「オレ、先に帰ってる……」

ふふ。箒は、私が持つてるわよ。

がんと箒でアルトの頭を殴ってから、私は彼を押しのけて城に入った。

——そして固まった。

一組の男女が、料理を食べていました。

「はい、あーん。美味し？」

「ああ。美味しいよ。君が作ったものは全て美味しい」

「やん、嬉しい！」

「……」

「わあ、兄上。——だよな？あれ」

私の後ろから「それ」を見て、王子が興味津々な顔をする。

「そう……ですね。おそらく……グードス様ではないかと……」
精神的にダメージを負いました。

フラッと壁に背中を付けて呆然とすると、アルトが土下座でもしそうな声で謝ってくる。

「本当に申し訳ない！その、入れろと殿下がおっしゃるから二階に案内したら、ちようどよくジュジュ嬢の眠る部屋に入ってしまった。魔法のことを申し上げたら、勝手に……」

「……………」

「少女漫画も真っ青な展開の速さで仲良くなられて……オレは居づらくて外にいたんだが……」

何も喋る気になれず、箒でポカポカとアルトを殴る。アルトもそれを甘んじて受ける。

……かなり、カオスな空間ではなからうか。

一方ではイチヤイチャして、一方では殴り殴られ、また一方では興味深げにそれを見る。

「ねえ、グードス様。明日、ミラ湖に行きませんか？」

「ミラ湖？ああ、行こうか」

「うふふ。あたし、とても楽しみですわ！」

「私もだ」

ああ、あの位置には王子が入るはずだったのに。

ミラ湖だなんて！

一度は行きたいデートスポットじゃないの！

「……帰りましょう、王子」

「うん」

一番落ち込んでもいいはずなのに、王子は落ち込んでいなかった。演技だとしたら、俳優になれるほどに。

箒を放り投げて、私は王子と共に城から出た。

「うう、すいませんでした……たとい蝶々でも私の魔法で届けるべきでした……」

あの白いカラスのせいでグードス様が……。白い鳥に導かれただな

んて。笑えないわよ。

「蝶々？」

「いえ、そこはどうでもいいんです。結果的には王子が振られてしまい……」

「振られてないから！」

お悔やみ申し上げます……。

パッカパッカとシリアスさに欠ける蹄の音を聞きながら、私と王子は王城に戻った。

「リセミル」

「何でしょう」

「もう、お互いに独身で生きていかない？」

「嫌ですよ。私は、結婚適齢期になったら結婚しますから」

「寿退社するの？」

「今のところ……しない予定ですネ」

パッカパッカ、パッカパッカ……

眠りの森の公爵令嬢(3) (後書き)

次は何にしようか考え中です。

残念な形で終わったグードスも出す予定です。

次の次くらいに新しい童話が入ります。

スイーツと惚気と序章（前書き）

今回は童話は関係ないです。

スイーツと惚気と序章

私の生活パターンが、変化した。

「ふふ、うふふふ。それでね、グードス様が……」

笑顔で座布団に座り、くねくねと身体をくねらせて笑っているジュ嬢。

「……………」

「……………」

無言で溜め息を吐く私と王子。

いつもなら黙々と大貧民をしていた王子の私室で、今はジュジュ嬢が部屋の主みたいな顔をしている。

「あら？——リセミルさん、紅茶がなくなったわ。注いでちょうだい」

「……了解しましたー」

メイドが置いていったポットを傾け、ジュジュ嬢のティーカップに紅茶を注ぐ。

これまでなら「嫌」と一蹴できたけど、最近はそんなことができない。

その理由は二つ！

一つは、ジュジュ嬢がグードス様と婚約したこと。アルト風に言う

と国に仕える私は、未来の王妃様の命令に従うしかない。

そして、二つ目！

二つ目は……。

数日前にさかのぼりまあす。

私は非番の日、いつも昼間に起きる。それがその日は、耳に悪い「

ウガーツ」という鳴き声で昼前に目を覚ました……覚まさせられた。
「……あ？」

毛布を頭からかぶったまま、それを見上げる。
真っ白なカラス。

——アルト？

手紙を生き物に変化させて、自分で相手の元に行かせる。それは魔女なら誰でもする魔法。

でも、手紙をカラスに変化させるのはアルトだけ。悪趣味よね。

カラスはウガーツと大声で鳴くと、白い煙が上がり手紙になった。

「けほっ、げほげほっ」起きたてに煙は辛い。涙ぐみながら咳き込んでいると、枕元に手紙が落ちた。

茶封筒に、透明なテープで封がしてある。

「？」

……何とも事務的な手紙ね。

封を開け、中から便箋を取り出す。

便箋には一切の飾りがなく、まるでプロの清書係が書いたかのような美しい字が並んでいる。

城の正門前にて待つ

——グードス||リナル

「……決闘？」

ベッドから抜け出して窓を開け、煙を出した。新鮮な空気は、寝間着の私には寒かった。

クローゼットには、黒や茶のローブとケープ、ワンピースがかかっている。

「ふふふ。どれにしようかなー？」

いかにも「魔女」らしいファッション。魔女にとって礼服にも等しい衣装なんだけど、私は大抵これを着ている。

だって、魔女が空色のワンピースなんて変じゃない？

魔的な感じが全くないよ!?

気分良く鼻歌を歌っていると、不愉快な音に消された。ばっさばっさとその音は大きくなっていき、

「ウガーッ!!」

カラス第二弾!ひとしきり私を急かして大量の煙を放出すると、白い紙屑が窓辺に落ちる。第二弾は急かすためだけに作られたのね。一番端にある黒ワンピースを着て、財布の入っている鞆を取ると部屋を出た。

……ここ三ヶ月ほど使われていない箒は、今日も放置されていた。

正門前にいたのは、手紙の贈り主、グードス様とカラスを作ったアルトだった。

グードス様はジュジュ嬢とのデレデレ顔からは考えられない仏頂面をしてる。

「遅いぞ、リセミル」

「あんたのカラスがうるさいのよ」

文句を言ってくるアルトに言い返し、私はグードス様の前に立った。

「……………」

「……あのー、ご用件は」

グードス様と私って、相性悪いのよね。

グードス様って、基本的に女性に優しいのよ。でも!私なんて目が合ったら睨まれるの。

でも、まあ、それも仕方ないかなー?なんて。偶然グードス様がいるところに爆薬を落したり、人体に有毒な煙を出す薬草を焼いたり……ね。あははは……。

「アルト。お前は帰れ」グードス様は、私ではなくアルトを見て言った。

「え?殿下?」

困惑気味なアルト。

「あはは、帰れ帰れ、アルト!」

「お前は黙れ」

アルトは何か言おうとしたけど、結局渋々帰った。

さて。私、実は自分で思っているよりもこの人に嫌われてるんじゃないだろうか。なんて思った。

だって無言で睨んでくるんだもん!!

「あ、あのグードス様。この度のご婚約、まことにおめでたいことでありまして、えー、ますますのご発展がそのー……」

駄目だ。自分で何が言いたいのかわからなくなってきた。

「ジュジュのことか？」

「そっ、そうですね」

すこーしだけ空気が和んだ。憎たらしいジュジュ嬢だけど、私の中でわずかに好感度が上がった。

「そう、そのことで話があるんだ。今出られるか？」

まあ、外出に誘われちゃったよ！

「きゃっ、デートですか？」

「……」

冗談ですよ。そんな睨まないでください。

あまりに冷たい視線を向けられ、流石の私も真面目な顔を作った。

「それで、どこに行くんですか？ジュジュ嬢……様は城にいますし、私でなくてはいけないんですよね？」

「まあ、そうだな」

簡単に頷くと、グードス様は私に背を向けて歩きだした。これは……ついて来いということだろうか。

せっかくの休日が……。と思わなくなかったけど、いまさら断るのも変かな、と思い、今日が休日だという虚しい事実忘れられることにした。

「街？ですか？」

グードス様が向かったのは、城下街のほうだった。私もたまに来る。

王子とババヌキとかして、負けたほうが果実水を奢ったりね！

——まあ、結局どちらが勝っても王子が払ってくれるんだけど。

グードス様は街を抜け、高級店の並ぶ通りに出た。これだけ足の長さが違えばはぐれてもおかしくなかったのに、私とグードス様ははぐれることなく人混みを抜けた。

「お前、甘いものは好きか？」

「ボーナスの次に好きです」

私の微妙な返事に、グードス様はふむと満足げに頷き、とある店の扉に手をかけた。

「…………っ！」

高級洋風スイーツ店『メリー』……………！！！！

「ぐ…………こ…………」

グードス様、ここは！

と言いたかったのです。驚きで声にならなかったけど！
うわ、すごい！

ここ何年間か振りのテンションになってるよね私！？

「メリーじゃあないですかあ！！」

「知っているのか。ジュジュも知っていたが」

『彼氏に奢ってもらおう♪高級スイーツ店怒涛のランキング』というグルメ雑誌に載ってたのよ！年に三回、不定期に出てる雑誌なんだけど、購読してるの。毎回『メリー』は五位以内にランキングしてるのよ！！

一度王子を誘ったんだけど、「高い！」って断られた（代わりに近所の喫茶店でプリンを奢ってくれた）。

王子は王位継承権を完全に放棄してるから、王様もあまり口煩いことを言わないの。

お金を稼いでこない王子は、お小遣制なんだって。

「ずっと来たかったんですよー！」

「ふうん」

ここの、ゴールデンプリンフルーツパフェが食べたかった！
私の時給×十五回分の値段だったから泣く泣く諦めたんだけど。
扉を開けるとカランコロンと入室を知らせる鈴がなった。

「……………」

これは……………」

私の視界ぎりぎりまで、ギッシリとカラフルな物体で埋めつくされている。

左から、ストロベリーエンジェルパイ、アップルミントパイ、チョコバナナスターパフェ、季節のフルーツと抹茶とバニラのクレープ……………」他多数。

王子がここにいたら、「見てるだけで気分が悪くなってきた」と言っ
って退席しそう。スイーツ好きの私は平気だけど。

一つが高価なくせに、これだけの量。割り勘だったらどうしよう。
いやでも、店員が来るなり頼みだしたのはグードス様だし……………」
たらりと背筋に変な汗が流れる。

素直に喜べない……………」

リナール王国の全女性国民の長年の夢が今叶っているのに！

「どうした？ 食べないのか？」

一人コーヒーのブラックを飲むグードス様。

「あ……………」あの、これから食べればいいんでしょうかね」

安いケーキでもこんなに食べたことがない。てか、安くてもこれだ
け頼めば相当な額よ！？ 目の前のゴールデンプリンフルーツパフェ
用の長いスプーンを持って、私は笑うしかなかった。

「あのグードス様。メリーの支払いは……………」その……………」

「私の奢りだ」

「いただきますーすー！！」

ナッツのかかっている生クリームにスプーンを突き刺した。

リナール王国王城

「二人でババヌキは飽きました」

残ったジョーカーのカードをテーブル上に捨てて、ジュジュは言った。

「同感です」

キジュも頷く。

今日はリセミルが非番で、いつもは三人でするカードゲームもプレイヤーは二人になる。

「あーあ、もう。リセミルさんに休みなんて必要ないではありませんん？」

「いや……それは」

ジュジュのめちゃくちゃな言い分に、キジュは苦笑いを漏らした。

「一応、これは仕事ですからね。労働基準法に則って……」

「あたしは次期王妃なんですよ!？」

キジュは苦笑いを深める。

——こんな義姉は嫌だなあ。

なんて未来の義弟が思っていることにも気付かず、ジュジュは立ち上がった。

「もう! 楽しくありませんわ! グードス様の元に行きます」

「え? でも兄上は……」

ジュジュはキジュの部屋に来て、「本日はグードス様は用事があるとのことなので、遊びにきました」と言った。

キジュの嫌がりにも気付かずにカードゲームを開始したのだ。

「押しかけます」

「はあ……」

どうぞお好きに。

そうキジュが続ける前に、ジュジュは部屋を出た。

高級洋風スイーツ店『メリー』

パフェ、クレープ、パイ、ケーキ……。片っ端から食べていくと、目の前のグードス様の顔色が悪いように感じられた。

「どうひまひは？（どうしました？）」

「……いや、よく食べられるものだなと思って……」

私の意味不明な言葉を的確に聞き取り、グードス様は私から……というよりもきらめくスイーツ達から顔を背けた。

もったいない。私なんて絵師を呼び寄せて書き写させたいくらいよ！

「グードス様もどうですか？（グードス様の）奢りですし、いくらでもどうぞ」

「……いい」

グイツとコーヒーを飲み干すと、グードス様は私を見た。

「……………はふいか？（何か？）」

グードス様の、ふと浮かべられた笑み。女性に見せると言うよりは、友人に見せるような。

口の周りにクリームがついてるのにも気付かないで、ぼけっと私はそれを見た。

「これは、私の礼だ。お前ときたら、変な魔法使って人の部屋を荒らすわ、たき火がしたいと言い出して山火事を起こしかけるわ、使い魔と言ってドブネズミを城に放すわ……そして触るのが怖いと言ったり……」

——そんなにしたかしら。

と言いたいところだけど、記憶にある。

言い訳はあるわよ？

部屋を荒らしたのは、掃除に失敗したからだし、たき火は……その。山火事は鎮火したわけだしね？ドブネズミだって、思ってたよりも大きかったの！

「……………」

「——今回もろくなことはしないと思っていたが、
そこで言葉を切った。」

冷めかけた紅茶を飲み、私も動きを止める。

テーブル上には、半分は食べ切ったけど半分は残っているプリティ・
スイーツ達。アイスが溶けても美しいわ。

「今回は結構なことをしてくれた!」

「ぐ、グードス様……」

ちよつと、ここ、感動の場面じゃない?

グツと手を握って笑い合う場面よね!?

「お前のお陰で、私は今とても幸せだ。ミラ湖でのジュジュときたら、何とも魅力的なんだ。まるで天使。ビーナス。ミューズ……!ミラ湖は天使の湖としても有名なんだが、そこにあるボートに乗ったジュジュは……」

笑い合う場面ではありませんでした。

リナール王国王城

「ちよつと、キジュ様!」

しばらくして、再びジュジュがキジュの部屋を訪れた。

リセミルに「これ、絶対読んで下さい面白いから!」と押し付けられた『眠りの森の美少女』から目を離し、キジュは顔を傾けた。

「……ジュジュ嬢? どうしました」

「今、グードス様の魔女さんの……えつと……」

「アルト?」

「そうアルトさんから、衝撃的な事実を聞いたんですのよ!」

重いドレスを引きずりながら歩いてきて、憤慨した様子のままソファに腰掛ける。

「聞いてくださいませ!! グードス様とリセミルさんが、行動を共にしているようなのです!」

甲高い声で喚き立てる未来の義姉。

「――は？」

キジュはそう返すしかできなかった。

ありえないと言いつけるペアである。リセミルのグードスに対する悪事の数々は、多少リセミルをひいき目に見ているキジュでさえグードスに同情してしまうほどだ。本人曰く、「魔法の失敗とか偶然とか」と言っているが。

「いやいやいや、決闘でもしてるのでは？」

「そんなはずありませんわ。二人は楽しく出掛けているのよ、きつと！」「えー……。違うと思いますけどね。きつと」

面倒臭いな、と思いながらもキジュはジュジュの話を聞く態勢になった。

「そしてあたし、リセミルさんの部屋に侵入したんですの。行き先が分からないかなと思って」

そう言うと、ジュジュは後ろから数冊の雑誌を取り出した。

『月刊玉の輿』『週間ピンキリスーツ』『魔女通信』『彼氏に奢ってもらおう♪高級スイーツ店怒涛のランキング』

「……」

個性的過ぎる雑誌の数々に、キジュは言葉を失った。

ジュジュはすでに驚いた後なのか、はたまた驚くほどではないと思っ
ているのか、その内の一冊、『彼氏に（略）』を手を取った。

「見てくださいな、この付箋を」

『彼氏に（略）』には一つだけ付箋が貼ってあった。面倒臭がりな
リセミルには珍しい行動だ。

（リセミルなら端を折るタイプだと思ってたけど……）

妙な感心をキジュがしている間に、ジュジュはページをめくった。

「ほら、これですわ！『メリー』……」

「メリー？……どこかで聞いたことがあるような……」

「スイーツのお店です。ランクインしてるお店の中で、唯一歩いて
行ける距離にありますの。あたしもグードス様と行きました」

スイーツ？と考え、キジュも『メリー』が思い当たった。

「思い出した。僕もリセミルに誘われたことがあります」軽く言ったのだが、ジュジュはええ、と重々しく頷く。

「じゃあ、やはりここで決まりね！さあ行きましょう、キジュ様。お互いのパートナーを探しに！！」

「え。パートナー？僕も？」

一日暇になったアルトは、ジュジュに引きずられるキジュを見た。
「今日は変なペアをよく見るな……」

高級洋風スイーツ店『メリー』

「……でジュジュが……それで……」

なるべく耳を傾けないようにスイーツを口に入れていると、やっとグードス様は口を閉じた。

「——三日後、父上の名代で地方に行くことになった。その間、ジュジュの相手をしてほしい」

「えー。嫌で——」

「メリーは私の奢りだ」

「……」

私とグードス様は見つめ合い、どちらからともなく笑いあった。

「あはは……了解です……」

「はは。頼んだぞ」

バニラアイスをすくって口に運び、私はふと目を窓に向けた。

「ぐっ!？」

グードス様も窓の外を見て。

「ん？——あ」

そこには。

男女二人組なのに全く恋人には見えない人達がいた。

つまり、顔を真っ赤にして怒りで震えている女性——ジュジュ嬢と、
疲れた顔の男性——キジュ王子。

「どういうつもりよ、リセミルさん！」

ありえない速さで店内に入ってくると、ジュジュ嬢はそう言っ
て私に詰め寄った。

スイーツは大半が食べつくされて、私は最後の一つに手を伸ばす。

「嫉妬ですかあ？」ヒメリングのタルトを食べながらニヤニヤと笑
うと、ジュジュ嬢は店員にデザートを頼んでから私を鼻で笑った。

「リセミルさんなんて、ライバルにすらならないわよ」

「……む」

「あたしが怒っているのは、どうしてあたしよりもリセミルさんと
過ごしてるのかってこと！」

「グードス様に聞いてください……」

王子は辟易とした様子でグードス様の隣に座る。

「……疲れた……」

「キジュ。どうしてジュジュといるんだ」

「兄上が不用意にリセミルと出掛けたりするからですよ」

「私は、ジュジュのことをリセミルに頼んでいたんだ」

こう聞くと、子守とか犬の世話みたいよね。とは思っても言わない
けど。

「あたしのことを頼む？ そんな、グードス様、あたしを置いてどこ
かに行ってしまうの……!？」

「ジュジュ……」

手を伸ばして、前に座るジュジュ嬢の頭を撫でるグードス様。いき
なり女の子らしくなったジュジュ嬢はそれを受け入れて照れている。
……あのさ。

「何で隣に座んないの!？」

「僕もそれ思った」

私の叫びを聞き、なおかつ同意を示してくれたのは王子だけだった。

「ねえリセミルさん。いつまでいるの？もう帰っていいわよ」
美しい笑顔と共に、ジュジュ嬢は私の耳元に囁いた。
言われなくても、帰るわよ。

私と王子はメリーを出て、城に戻った。途中で王子が喫茶店に誘ってくれたけど、私のお腹は高級スイーツでいっぱいだった。

……と、グードス様から高級スイーツを奢ってもらいジュジュ嬢の世話をしなくちゃならなくなった。

カーラ王国王城

「よう」

声をかけられ、妖精のルタは目を覚ました。今はまだ真夜中で、鳥も草木も眠っている。

「……んー？」

「起きろつつってんだろ、ルタ！おいこら起きろ！」

ルタはずっと住み着いている快適な空間……鏡から抜け出した。

「何だよー、……。ドリス！？」

相手の姿をその丸い瞳に映して、ルタは悲鳴を上げた。

乱暴者かつセンスが悪いことで有名な妖精だったのだ。

「お前、いい寝床持ってたんじゃない。しかも王城？」

「ね、寝床って言ったってオイラ、ちゃんと働いてるんだ」

「はあ？どうせお前みたいな馬鹿でとろい妖精でもできる簡単なことなんだろ？」

ルタは黙り込んだ。

ドリスの言う通りだったからだ。

「今日からここには俺が住む。仕事だって、お前より上手くやって

やるよ」

——ドリスには、無理だと思う。

小心者なルタは何も言えず、ただ小さく頷いた。

鏡に飛び込むように入ったドリスを羨ましく感じながら、ルタは職場の上司のもとに行った。

スイーツと惚気と序章（後書き）

最後のは、次にくる童話の序章的なものです。
なんとなく分かると思いますが……。

白雪嬢を殺せ！ (1) (前書き)

二ページ目からリセミルが登場します。
前半は、イザベラの話ですね。

白雪嬢を殺せ！（1）

カーラ王国王城

マリー王妃は、朝起きてから鏡の前に立つのが日課だ。

「鏡よ鏡」

その鏡は、マリー王妃の魔女、イザベラから贈られたものだった。
『魔法の鏡』だと、イザベラは言った。

「一番美しいのは誰？」

鏡は毎日マリー王妃の名を呼んでくれる。イザベラが贈ってくれたものだし、種やしかけはあるのだろうか——マリー王妃は鏡を信じて問い掛け続けていた。

「一番美しいのは、白雪だろ」

鏡はいつもと違う名を呼んだ。

マリー王妃は、初めて自分が鏡に支えられたことを知る。

別の名を呼ばれたことでマリー王妃はかなりのショックを受けた。

「ご主人様あ、かなり煩いのが扉の前にいるんですけど」

寝起きの悪いイザベラを起こしたのは、使い魔のエヌだった。

エヌは鳩の姿をしていて、イザベラが小さな頃から彼女に付きまといっているのだ。

「煩いの？……誰だ」

バサバサと白い翼を羽ばたかせて、エヌは扉の前に行く。

ゆっくりと自然に扉が開くのは、エヌの魔法だろう。閉じかけるまぶたを必死に開いて、イザベラはエヌを見ていた。

「おら、入れよ」

ずいぶんと横柄な態度のエヌに、「……はい」と謙虚な声をする。エヌよりも小さくて、羽が生えている生き物……それは妖精だ。

「ルタ」

「うわあああん、イザベラ様あ!!」

ルタは半泣きでイザベラにしがみついていた。

「あ、こらチビ!」

「どおしましようにっ! ドリスが、ドリスがああ!!」

「な、なんだどうした」

ルタは鼻声でドリスに鏡から迫り出された旨を語った。

「でもっ、イザベラ様の部屋の扉があがなくてー!!」

「わ、悪かった」

「ドリスは趣味が悪いんですっ、マリー様があいつに聞く前に……!」

聞く?と首を捻り、イザベラは目を見開いた。

「マリー様!!」

寝巻きにカーディガンを羽織ると、イザベラは部屋を飛び出した。目指す場所はマリー王妃の寝室だ。

強く扉を叩くと、中から「うう……」と泣き声が聞こえる。

「マリー様!! 開けますよ!」

「イザベラあ。鏡が、鏡が……」

許可をもらって魔法で鍵を開くと、イザベラは部屋に飛び込んだ。ベッドの上で毛布をかぶり、マリー王妃は目を真っ赤にしていた。

「鏡が、あたくしを醜いって……」

「ええ!」

「うう……もう嫌。今日の予定は全てキャンセルするわ。寝るっ」

イザベラは何か言おうと口を開けたり閉めたりしてから、結局何も言わずに魔法の鏡を掴んで部屋を出た。

「ドリスう！」

部屋に戻り、イザベラは鏡をベッドにたたき付けた。ルタが鏡面に立ち、ドンドンと叩く。

「っせーな。んだよ、ルタかよ」

鏡面が波立ち、そこから現れたのはルタと同じくらいの背丈の妖精だ。

ルタよりも目つきが鋭く、羽が大きい。

「おい妖精、お前、マリー様に何を言った!？」

羽根を掴んでイザベラが揺さぶると、ドリスはうっと口を押さえる。

「き、気持ち……わる……」

「箒に乗ったりセミルのようなことを言うな」

すぐさま手を離す。

「何を言った、って……白雪が可愛いって言ってからー、お前はブスっていだだだだ」

首ねっこを引っつかむと、ドリスは悲鳴を上げた。それを無視して、イザベラは笑う。

「ブスだと？」

「あ、いや。俺の好みではないかな、と」

「ふん。大体、白雪って誰だ」

「あ、聞いてくれるか？」

ドリスは目を輝かせてにこにこ笑いはじめた。顔はさながら恋する妖精である。

「グレイ男爵のこの一人娘なんだがな？もうすっげ可愛いの！美女！美女！」

「なに興奮してるんだ……」

ふむ、とエヌが顎に羽を当てた。

「ご主人様、その娘の姿を映してもらえばよいのでは？」
「む？」

「妖精の魔法ならばできると思いますよ」
ドリスはブンブンと頷く。

「おお、出来る出来る！見せてやるよ」
ドリスが小さな手を鏡に向けると、彼が出てきたときのように表面が揺れる。

波打った後に出てくるのは、一人の少女。

「可愛い……」

「ご主人様の次に可愛いかもしれませんね」
化粧水の宣伝に使われそうな白い肌。

どのシャンプーやリンスを使っているのかしら、と思わせる豊かな黒髪。

——つまり可愛かった。

ついイザベラとエヌが見惚れていると、ルタが鏡に手をついた。

「ドリス……悪趣味が治ったんだね。良かった……」

「なんだそりゃ」

「だって、ドリスが可愛いっていう子は大抵可愛くないから」
さらりと失礼なことを言うルタに、ドリスは苦笑する。

「確かに、マリー様より美しい」

「——エヌ？」

「いやでも、ご主人様の足元にも及びませんよ。ご心配なく！」

「もうお前はどうでもいい」

イザベラは溜め息をついた。

白雪がいる限り、マリー王妃に幸せは来ない。マリー王妃を国一番の美女にするには……。

「仕方ない。白雪を殺そう」

え、とその場にいた皆がイザベラを見た。

リナール王国王城

グードス様が、王様の名代として地方に行っている頃。私達の間では、人生ゲームが流行っていた。

「あ、私結婚ー」

「ええ？お祝い金を払わなくてはいけないじゃないの」

「僕はもう子持ちだよ」

「ゲームの中では素早く結婚しますね」

飽きずに毎日毎日人生ゲームを繰り返す。

だって退屈なんだから！暇！暇なの！

決算が終了し、見事銀メダルをとった私は絨毯の上に倒れ込んだ。

「まあ。汚いわよ」

「そうだよ。寝るならベッドで寝てくれ」

「だって暇なんだから――」

ん、という言葉は、コンコンというノック音に邪魔された。

「失礼致します、キジュ殿下。そちらにリセミル様はいらっしゃいますか？」

メイドさんの声。

毎日王子の部屋にいるし、それが仕事でもあるからこの部屋に来たらしい。

「私？」

「はい。イザベラという方が来られておりますが」

「イザベラ……通していいよー」

扉を開いたメイドさんは、寝転がった私を見て目を見開いた。

「あら」

「驚いた？」

「驚きました……。あつ、イザベラ様をお通ししますねっ」

メイドさんが出ていって、私はむくりと起き上がった。絨毯の糸屑がついた私の背中を、王子が払ってくれた。

「イザベラって、リセミルさんの友達なの？」

戸棚からモノポリを取り出しながら、ジュジュ嬢が聞く。

「悪友ですかね」イザベラは、昔アパートに住んでいた時の隣人だった。私よりも五つ年上の二十歳で、今はカーラ王国の王妃様の魔女をしている。

学歴もあるエリートなんだけど、気味が悪いほどのマリー王妃の信奉者なのよ。

「リセミル様、お客様を応接間にお通しました」

先程のメイドさんが戻ってきて、私の髪から絨毯の糸屑をつまみとった。

ジュジュ嬢は彼女の私室に戻り、私と王子が応接間に向かう。

私が私のお客さんに会うには、私の雇い主である王子も会わなくちゃいけないの。

「魔女ですからねー、黒髪黒目ですよ」

「ふうん」

「あ、でもー、イザベラは王子の花嫁にはなれませんよ。イザベラはマリー王妃一筋ですから」

する気ないよ、と王子は呟いた。

応接間に入ると、ソファに喪服のようなドレスを着たイザベラが座っていた。その横には、イザベラとは対照的に白い鳩が留まっている。

「イザベラ」

私が呼び掛けると、イザベラはゆっくりと私を振り返ると、

「リセミル。お前の無駄な愛嬌は使える。ぜひとも私に力を貸してくれっ」

すごい剣幕で私に掴みかかってきた！

「ぐえっ!？」

「ちょ……リセミル？」

イザベラから私を救ってくれたのは王子だった。イザベラを睨むように見る。

「僕の魔女に何をするんだ」

「リセミルの主……ということは、貴方がキジュ王子ですか。私はカーラ王国の王妃マリー・カーラの魔女、イザベラです」

礼儀正しく腰を折られ、王子も私の手首を掴む力を緩めた。

「リセミル。今回は、非常に私的な用事で来たのだが」

と言うことで国間の問題でないことを王子に伝え、イザベラは私の手を掴んだ。

「協力を頼みたいことがある」

「協力? 何？」

チラリと王子を見て、イザベラは私の耳元に唇を寄せ、囁いた。

「白雪という男爵令嬢を殺したいのだ」

白雪嬢を殺せ！（1）（後書き）

どうして白雪だけ漢字なのかな、というツツコミはなしでお願いします！

白雪嬢を殺せ！ (2) (前書き)

白雪登場です。

白雪嬢を殺せ！（２）

あるところに、ホワイトスノーという娘がいました。

ホワイトスノーは心も容姿も美しい娘でした。しかし、ホワイトスノーの美しさに嫉妬した王妃様は、魔女を使って彼女を殺そうとしたのです。

魔女は、ホワイトスノーの両親が留守の時に彼女の家を訪ねました。

『どなたかしら？』

『林檎売りだよ。ここを開けておくれ。赤く熟れた、美味しい林檎を食べたくないかね？』

ホワイトスノーは扉を開けて、魔女を家に入れました。

魔女の差し出した林檎は赤く、本当に甘そうでした。

『さあ、ホワイトスノー』

『ええ』

ホワイトスノーが林檎を一口かじると、彼女はそのまま倒れてしまいました。

魔女が渡した林檎は、毒林檎だったのです。

魔女はホワイトスノーの家から出て、王妃様にホワイトスノーは死んだと告げました。

ホワイトスノーの家では、両親が娘の死を嘆いていました。

ホワイトスノーはガラスの棺に横たえられ、美しい死に顔を見せていました。

そして、死んでもなお美しいホワイトスノーの噂は、街を越え都市を越え、なんと王都に住む王子様の耳にも入るほどになったのです。

『そのように美しい娘を、私も見てみたい』

王子様は馬で駆けると、ホワイトスノーの家に行きました。

ガラスの棺で眠る美女に、王子様はくぎ付けになりました。

『なんと美しい』

王子様はゆっくりと棺のふたを開け、ホワイトスノーに口づけまし

た。

すると、ホワイтスノーはまぶたを開いたのです！

ホワイтスノーは美しい王子様に一目惚れし、二人は幸せに暮らしました。

……。

イザベラから白雪の話を聞き、私が昔ハマった小説を思い出してしまった。

そう、シチュエーションが似ているとは思わない？特にマリー様とイザベラらへんが。

「リセミル。聞いているのか？」

「聞いているよ。その白雪嬢って、本当に美女なの？」

念をおすと、イザベラは嫌そうに頷いた。イザベラがこんな顔をするってことは、きっと真実なんだろうね。

マリー様大好きなイザベラが認めるってことは、相当美しいはず。

「……おい？」

久しぶりに会うエヌの第一声を無視して、私はグッと王子の手を握った。

「り、リセミル！？」

「王子、グッドタイミングですよ。白雪を妻に迎えましょう！」

私の手は振りほどかず、首を振ることで嫌がる王子。

「嫌だっ」

「何で——」

トンと私と王子の間に手刀が下ろされた。咄嗟に手を離して距離をとる。

「おい」

「なによ、イザベラ」

「白雪は殺すと言ってるだろうが」

でも、マリー様が国一番の美女になるために人を殺さなくてもいい

と思わない？

それに白雪嬢が王子のお嫁さんになったらリナール王国の住人になるわけで。白雪が王子のお嫁さんになればリナールも笑顔、カーラも笑顔で、ちょうどいいじゃない。

それを私が説明すると、

「なるほど」

イザベラはあっさり頷いた。

何と言うか……本当にイザベラの中でマリー様以外の人ってどうでもいいのね。

「国一番じゃなくて大陸一を目指してくれっ!!」

一人反対する王子。

王子ー、白雪嬢が死んでもいいんですか？

「リセミルも良いことを言うじゃないですか」

「エヌ。お前も賛成か？」

「もちろんです。ご主人様に犯罪者になどしてもらいたくありませんから」

私の意見に賛成してくれるイザベラとエヌの主従。

「……ほら。言い出しっぺが賛成してるんですから。ね」

「……」

王子の表情に諦めの色が滲んだのを見て、私は手を離した。

「林檎よ、林檎」

カーラ王国の城下街……もつと言えば、果物屋で、私とイザベラは争っていた。

「今の季節、林檎は……。桃じゃだめか」

「駄目よ！林檎！林檎!!」

「あるにはあるが……かなり高価だぞ」

王子とエヌは店頭で争う私達を疲れた目で見てる。かれこれ三十分も続けてるからなー。

「真っ赤で美味しそうじゃなきや駄目なのよ。それで毒林檎を作るの！」

「……殺すのは止めるのではなかったのか？」

本当に殺すわけじゃないわっ。

「ご主人、林檎はあるか？」

溜め息をついて果物屋の主人に言うイザベラに、私は「赤く熟れたものを！」と付け足した。

主人は紅玉のような林檎を持ってきて、その値段を聞いたイザベラは支払いを拒絶した。

「ようこそ、キジュ殿下。しかしまた急に……いかがされました？」
王城に着くと、王様の侍従がやって来た。さすがに隣国の王子が城に来たのに何の待遇もしないわけにはいかないみたい。

「ああいや……ちょっと所用が……」

「陛下にご用でしょうか？グードス殿下の結婚式にはご出席なさるようなので、その件でしたら——」

「いえ、本当に大した用ではないので」

まるで早口言葉のように素早く言い終えて、王子はその場から退散した。

「キジュ殿下、あのようなあしらいでは我が国を馬鹿にしたようにしか見えんぞ」

煩く羽ばたくエヌと王子は、果物屋の三十分で仲良くなったらしい。

「良いんだよ、僕は。兄上が国王になったら公爵位をもらって田舎で暮らすから」

「その時には私も雇ってくださいね」

雇い口を失いかけた私が焦って言えば、王子は「……魔女として？
なんて聞いてくる。」

当たり前ですよ！

ガヤガヤと歩いて到着したのは、イザベラの部屋。相当デカイその

部屋に入ると、ひび割れた鏡がベッドに転がっていた。

「あー！おい、イザベラっ、白雪を殺したんじゃないかなーだろうな！？」
どこからか声がしたかと思って部屋の中を動き回れば、鏡のそばに妖精がいた。

「あ。この子がルタ？」

「イザベラ様じゃない魔女だ……」

なんとも頭の悪そうな話し方が可愛い。でも、話し方的にさっきのとは違うような——あ。

「鏡の中にいるのね。ドリス？」

性格の悪そうな妖精が鏡の中にいた。
ダンダンと鏡を内側から叩いている。

「あはは。閉じ込めたの？」

「このチビがご主人様を侮辱するからだ」
エヌが羽ばたいて鏡の横に留まった。

「侮辱？」

「白雪を殺そうとご提案なさったご主人様を、馬鹿だアホだのと罵って！この黒チビめっ」

じゃあ、割れた鏡はドリスが抵抗してできた傷ね。
僅かに同情しつつ、私はイザベラを振り返った。

「早速決行するわよ！」

「え。今からか？」

あつたりまえでしょ！。

「だって、マリー様閉じこもったんでしょ！？」

「だが食事は召し上がってくださいるし……」

「有言実行よ」

カーラ王国からリナル王国まで一往復したイザベラは疲れた様子だったけど、私が思い切り急かせば何かを持ってきた。

色鮮やかな液体が数種と、薬草。

その横に紙袋を置く。

「毒の材料だ。調合する材料によっては、死なないようにも仮死状

態にもできる」

そう言うと、イザベラは端から薬草の名前を言っていた。メジャ―なものばかりだったし、私も一応母さんから教わっていたから効能は分かる。

チラリと確認すれば、王子とエヌとルタは雑談で盛り上がっていた。

「眠り薬を作るわ。弱めで、私の魔法で解けるくらいのを」

「自分で作れるか？」

「……馬鹿にしてんの？」

料理用の小さな鍋に薬品やら、薬草を煮出した汁やらを突っ込んでお玉でかき混ぜる。沸騰したのを確認して火を止めた。

「エヌ、ちょっと来て」

鍋を見つめながらエヌを呼ぶ。

「はあ？何だ？」

「こっち、こっち……えいつ」

プチッと羽を抜いた。一枚が小さくないので、エヌは悲鳴を上げた。

「だあああああっ！！」

「ごめんね、もう行って良いよ」

「こんの馬鹿魔女お！」

涙目で私を睨む鳩は無視！

羽で鍋の中の液体を混ぜた。

エヌの羽には魔力があるから、その魔力を液体に移すの。

そしてもう一度沸騰させれば、……完成！

誰でも簡単☆リセミル印の眠り薬！

——簡単じゃないか。

そこにとぷんと林檎を漬け、すぐにかけてお皿の上に置いた。

「毒林檎の完成！わー、パチパチパチ」

「……のるべき？」

イザベラが困惑した目で私を見た。

赤い頭巾をした私の頭を、王子が撫でた。

「可愛い……」

「ふっ。当然ですね」

手籠には毒林檎。

「白雪の家はここだ」

眠り薬を試飲をさせたエヌは間抜けな格好で寝ている。

この赤い頭巾は、イザベラが調達してきた。魔女らしいローブを脱がせ、これを被せてきた。ワンピースは黒だから、なんだかミスマツチじゃなからうか。

イザベラが渡してきた地図を見て、私は頷いた。

「オッケー、ここね」

「ああ。ここだ。私達はここにいるから。何かあったら手紙で合図しろよ」

「任せなさい」

ヒラヒラと手を振ってから、私はイザベラの部屋を出た。

城から出る時の門番の顔を思い出しながら、私はスキップして歩く。誰この少女！？って感じだった。

「真っ赤な頭巾の赤頭巾ちゃあーん、ららら」

街をピョンピョン跳ねながら歩いていると、林檎がスポンと抜けて飛んだ。

「ああ！？私の毒……いや、林檎が！」

林檎は弧を描き、誰かの頭に衝突した。その証拠に、「きゃっ」と声が出た。

「すみませんごめんなさい、大丈夫ですか？」

近づいたそこにいたのは、黒い髪の少女。私よりも年上みたい。瞳は黒くないので魔女ではないみたい。

「大丈夫よ。ありがとう」

「いえ……」

ニッコリと笑って、少女は私に林檎を渡した。

私だったら二言三言、文句言ってたわ。良い人だな……。

「あ、そうだわ。ねえ貴女一人？」

「え？」

「これ、お店の人の勘違いで多く買ってしまったの。一つ食べてくだらない？」

そう渡されたのはみたらし団子。

「……いただきます」

「ええ、どうぞ」

私と少女は、何となく一緒に歩きだす。

「ね、貴女、魔女よね？」

「う？あ、そうだけど……人だよね？」

「ええそうよ！」

向かう方向は一緒だった。

別に私が少女に合わせているわけでも、少女が私に合わせているわけでもない（と、思う）。

「私、白雪って言うの。白雪Ⅱグレイよ」「私はリセミ——ん？」
ん？え？今何て？

固まった頭と共に足も止まる。みたらし団子を噛む口だけを動かして、「え？」と聞き直した。

「あ、ごめん聞き間違えたかも」

「ふふ、大丈夫よ、リセミちゃん」

いや私はリセミではないんだが。

「白雪Ⅱグレイよ。これでも男爵令嬢なの。生活はカツカツなんだからね」

ペロツと舌を出す白雪嬢……いや、白雪は可愛い。可愛い……が、イザベラが言うほどに美しくはない。マリー様どころか、ジュジュ嬢と比べてもジュジュ嬢のほうが可愛いし美しいと思う。

「よろしくね、リセミちゃん。私、リセミちゃんと友達になりたいわ！」

白雪は、私の予想よりも可愛くなくて、そして心の優しい女の子だった。

白雪嬢を殺せ！（2）（後書き）

リセミルは非常に失礼なことを考えてますね……。まあ口に出してないからいいや、というのが彼女の言い分でしょうか。

白雪嬢を殺せ！（3）

……。

友達になりたいわ！なんてダイレクトに言われたのは初めてです。

ここは「私もなりたい」と言うべきなのか「馬鹿、もう友達でしょ」と大人ぶるべきなのか迷うわよね。

私が選択を迷っていると、白雪は私の顔を覗き込んできた。

「リセミちゃん？」

「本当はリセミルなの、名前」

誤解を解くことを最優先しました。

本当はどうか、別に偽ってないけどさ。

「そうなの。リセミルちゃん……可愛い名前ね」

「……ありがとう。白雪、ちゃん。よろしくね」

何だこの空気！？みたいな甘酸っぱい雰囲気の流れている私と白雪。恋人か。

「ところで、リセミルちゃんはどこに向かっているの？こっちには住宅街しかないわよ？」

貴女の家在林檎を届けにいくの！

とはさすがに言えず、私は曖昧な笑みを浮かべる。

「別に用がないなら、私の家に来ない？とっても暇なのよ」

白雪はグッドなタイミングで私を家に誘った。

すごい、私いきなり人を部屋に呼べない！汚いもん。片付けに三十分は掛かるし。……まあ、ただたんに私が散らかし魔なだけなんだけどさー。

「いいの？」

演技でなく目を輝かせた私に、白雪は「もちろん」と笑った。

にっこりと笑った笑みには、妖精が好いたのを納得できる純粋さがあった。

そう言えば、イザベラは私を頼ってくる前に何もしなかったのかな。

「ここよ」

白雪が一つの屋敷の前で立ち止まる。荒れた庭が特徴的な、小さなお屋敷。

いや、小さなお屋敷がどんなだと言われても困るんだけど……庶民の家より大きいけど、貴族感覚で物を言わせていただければ、小さなめかな、って。いやもちろん、「お屋敷」と表記するレベルだからね!?

「庭師を雇う余裕がないの」

荒れた庭を見る私に、白雪は恥ずかしそうに言った。

「さ、入っ——」

「ちよおっと待ったー!!」

白雪が門に手をかけた瞬間、荒れた庭から何かがでてきた。

それは、私より年上っぽい男の子。

「ゾゾ？」

「白雪！」

男の子……ゾゾは、私をギラギラと睨む。

「おい魔女！」

「え？私？」

自分を指差したら、ゾゾはブンブンと頷く。

……この人も魔女だね。黒髪黒目だし。

「お前の目論みなんてお見通しなんだからなっ！」

ビシッと指を突き付けられ、さすがの私も怯んだ。

何も言えずにいると、強引に門扉を開けた白雪がゾゾの頭を撫でるように叩いた。

「もう、駄目じゃないゾゾ」

心外だというような表情を浮かべるゾゾ。

「白雪は、人を信じすぎなんだ」

ガチャーンと門は閉まり、私と二人を分けるような形になった。あれ？展開の速さについていけない。

「えーと……？なんで私悪役になってんの」

「お前も白雪を殺しにきたんだろ」

猫も顔負けな警戒心を見せて、ゾゾは言う。

お前「も」？

ということは。

「……イザベラが来たのね」

「名前は知らんが、白雪がいたらマリー様がどーたらこーたら言っ
て、屋敷に押し入ろうとしたんだぞ。返り討ちにしてやったわ！」
仮にも王妃様の魔女をしているイザベラは決して弱くない。いや、
どちらかと言えば強い。

そんなイザベラを倒すなんて、ゾゾったら実は強いんだろうか。

……なんて私が感心していると。

「ま、愛の力だよな」

ふっと勝利の笑みを浮かべて私を見た。

「……愛？」

「白雪と俺の、愛」

……。

「……えっ？」

私の中で何かが崩れた。

「もう、ゾゾ！」

恥ずかしそうにゾゾを止める白雪。本当に止めたい人の止め方じゃないわ。

「いやいや、お二人はそのー、恋人さん？」

二人は顔を見合わせ、少し照れながら頷いた。

がーん、と古風なショックを受けてしまう。王子ー、白雪に恋人が
いましたよう。王子の付け入る隙はないっぽいです。

親には秘密なの、と白雪が言った。

散々私を疑って、ゾゾは私に籠の中を見せろと言ってきた。

女の子の荷物を見せろだなんて、紳士じゃないことこの上ない。案の定白雪は憤慨して、私をころよくお屋敷に招待してくれた。

「へえ、ゾゾはグレイ男爵の魔女だったの」

緑茶でまったりと雑談。その頃には、私は毒林檎を使うつもりなんて全くなくなっていた。

「過去形じゃなくて、現在進行形でな」

お茶請けはクッキーを。白雪はお菓子作りまで得意らしい。

「私もねー、王子の魔女なの」

「王子様？……カールに王子がいたかしら」

「カールじゃなくて……リナルの」

すげえじゃん、と急須を傾けてお茶を注ごうとしていたゾゾが感嘆の声を上げる。

「見かけによらず優秀なのな」

「まあね」

親のツテで就職という、何とも言えない感じだけど。

「リセミルちゃんは恋人いるの？」

白雪とゾゾの馴れ初めを聞いていた途中、白雪がそんなことを言い出して。私と白雪のガールズトークは、日が暮れるまで続いた。

結局、出かけていた白雪の両親が帰ってきたことで中断され、またねと言い合ってグレイ男爵邸を出る。

すっかり暗くなった空を見ながら、私は籠の中の林檎のことを考えていた。

眠り薬を塗りたくられた林檎。眠りを解くには、私以上の实力を持つ魔法が魔法で起こすか、もしくは口づけをするしかない。そういう薬草を調合し、魔法をかけた。

「用無し、かなー」

「何が？」

頭巾に、誰かの手が乗った。

「林檎です……って、王子？」

振り向くとそこには王子。

「心配したよ。遅いじゃないか」

王子は私の横に並ぶと、「どうだった？」と聞いてきた。

「失敗した？」

「王子ー、張り切っているようで恐縮ですが、白雪には恋人がいま
した」

「別に張り切ってないけど。……恋人？」

「そうなんですよ」

深く頷いた後、私は王子に最初から最後まで今日の私に起こったこ
とを聞かせた。

「……とまあ、こんな感じなんですけど。」

「白雪嬢って、あまり可愛くなかったんだ」

全て聞き終えた王子の第一声はそれ。

「ええ。強いて言えば可愛いです。強いて言わなければ可愛くない
です」

「君って正直だよね」

正直って美德ですよ。

——空は暗くなっても、街の活気は落ちてない。むしろ昼よりも盛
り上がってるくらい。酒類やそのつまみが多く売られて、お客さん
の平均年齢も高くなってる。

「すごい混んでますね」

街には何度も行ったことがあるけど、暗くなってから来たのは初め
てだった。

「はぐれないようにしてくれ」

王子は私の手を取って器用に歩きだした。

王子と手を繋いだのは初めてじゃない。けれど、幸せそうな恋人達

を見た後だと虚しく感じる。

「でも……気の毒だね」

王子はポツリと呟く。

「え？」

「だって、そうだと思わない？ 没落貴族の令嬢が、何も持っていない魔女と結ばれるはずがない」

……その通り。

そして思い出した。

イザベラは、白雪を殺そうとしていたんだ。

白雪嬢の恋人（前書き）

今回はリセミルが出てきません。
なので二話同時に更新します。

白雪嬢の恋人

「――白雪」

ゾゾがグレイ男爵に仕えたのは、ゾゾが十歳の頃だった。ゾゾの実家は裕福で、わざわざ働かなくともそれなりの生活はできる。それに加えて、グレイ男爵は当時は既に没落寸前で、使用人には全て暇を出していた。実際、ゾゾがいくら働きたいといっても、彼らに魔女は必要なかった。

魔女なんて貴族からすれば宝石なようなものなのだ。いなくとも生活に困ることはない。

「なに？ゾゾ」

ゾゾが半ば強引に、街角で新聞を売ったほうが高額だという月給でグレイ男爵に仕えたのは白雪がいたからだった。

白雪とゾゾは幼なじみだ。自然と友人から恋人に変わっていった。「お前は、魔女と貴族が二人で幸せになれると思うか？」

リセミルと別れ、ゾゾの部屋でお茶会を再開していた。隣国の王子に仕えているという彼女は、きっとゾゾの気掛かりを理解してくれるだろう。

「もちろんよ、ゾゾ。将来、お嫁さんにしてくれるのでしょうか？」

白雪は理解してくれない。決定的なその瞬間がきて初めて、彼女はそのことに気づく。

それとも、既に気づいているのかもしれない。

「ああ。約束したからな」

きっと無理だろう。

白雪は断れない。

優しく育ててくれた両親の頼みを。彼らの恩を仇で返すような真似はできない。

コンコン、と扉がノックされた。

質素なドレスを着た、グレイ男爵夫人が立っていた。

ゾゾが彼女の前に立つと、グレイ男爵夫人はゾゾに目を合わせた。頼むわよ、とその目は訴えかけてきた。

『白雪には、ヴィーラ子爵のもとに嫁いでもらうことになった。明日、それを話そうと思う』

昨日、白雪が出かけた時に、ゾゾはグレイ男爵と夫人に呼び出されてそう切り出された。

ヴィーラ子爵。

目眩がした。好色で有名な、六十を過ぎた老人である。資金援助を目的としているのは目に見えていた。

『もしも、だ』

それを言うとき、男爵は有り得ないことを前提としたような表情をしていた。

『もしもあの子が逆らうようなら、お前からも話をしてもらいたい』
分かりました、と言ったとき、自分はどんな顔をしていたのか。

ゾゾは何も考えたくなかった。

「白雪。話があるのよ。来てちょうだい」

「話？ここではいけないのですか？」

「ステイブと私からの話なの」

父親の名に、白雪は不思議そうな顔をしながら母親の後に続いた。

「ゾゾも行きましょ？」

嫌な気分だった。胸が早く打ち、足が重い。

「……ああ」

行きたくない――。

何も知らない白雪は、微笑んでグレイ男爵を見つめていた。

「お父様。お話って、何でしょう？」

さすがに、グレイ男爵は眉を下げて切り出しづらそうだった。

白雪の親だけあって、彼らも心優しいのだ。

「白雪、ヴィーラ子爵のもとに、嫁いでくれないかな？あちらとはもう話をつけたんだが」

とぎれとぎれに紡がれた言葉に、白雪は「えっ？」と表情を変えずに聞き返した。

「だからね、ヴィーラ子爵のもとに嫁いでもらいたいのよ。貴女が嫁いでくれれば、私達は再び、豪華な生活ができるのよ」

いくら心優しくとも、贅沢を知ってしまえば全てが変わる。

グレイ男爵夫妻は、白雪がいることで希望を持ってしまう。いっそ白雪がいなければ、贅沢を望みはしないかもしれない。

「で、でも、私……」

何度もつかえながら、白雪がゾゾを見た。ゾゾは視線を合わせなかった。視線を合わせて、もし白雪が涙ぐんでいたら、彼女をさらって逃げ出してしまいたいそうだったから。

白雪。もしもお前が頼むなら、俺は命懸けでお前をさらったっていい。男爵家を支えるのは無理だけど、白雪一人を養うくらいの余裕ならばある。

けれど白雪は、両親のことを考える。好色な老人に自分を売った、心の優しかった両親を想って涙する。

「私、ゾゾと——」

「白雪」

ゾゾと恋人なの、なんて言って、結婚話がなくなるとでも思っているのだろうか。そんなわけがないのに。そんなことをしたらゾゾを遠ざけられてしまうだけで、何の意味もない。

「良い話じゃないか。これでまた、裕福な暮らしに戻れる」

絶対に、俺はお前が俺を愛するよりもお前のことを愛してるな、とゾゾは根拠なく思った。

諦める覚悟はできていた。白雪が老人の妻になったら、自分は実家に帰ろうと思う。誰かの妻になった白雪とは、友人にすらなれそうにない。

「ゾゾ……っ」

白雪は泣きそうな顔をした。ゾゾの台詞を考えれば当然だ。

白雪のその表情を見て、ゾゾは状況を忘れて綺麗だと思った。

なあ、白雪。どの道を選んでも誰かが不幸になるのなら、お前はどの道を選ぶのだろうか？

結局、白雪は頷かなかった。

そのことに安堵し、けれど自分と白雪の間に何かが出来たことをゾゾは理解した。部屋に戻ってから、白雪はゾゾに話し掛けなかった。

白雪を裏切った自分への、彼女なりの軽蔑であるように思えた。だって、仕方ないだろう？俺は魔女で……お前は貴族じゃないか。白雪が庶民だったら。ゾゾが貴族だったら。もしも逆の立場だったら、ゾゾは誰よりも白雪を選んだ。だけど白雪は、一人を選べない。

「……ね、ゾゾ」

「——えっ？」

「好きよ？」

いきなり……何だ？

「俺だって好きだ」

「きつと、ゾゾが思っているより……ずつと」

……？

意味が分からないままゾゾは部屋に戻った。

そのことに気がついたのは、深夜。

——白雪が消えた。

白雪嬢を殺せ！（４）

「リセミル。遅かったな。それで、成功したのか？」

私と王子が王城に戻ると、イザベラが私達を待っていてくれた。

「え」

手のつけられていない毒林檎がバスケットに入ってる。成功か失敗かで言えば、絶対に失敗だよね。でも、今の私には、白雪を王子の花嫁にする気はない。

「うーん……どちらかと言えば失敗？かな？」

「はあ？」

眉をひそめるイザベラ。

「あ、あんただってねえ、ゾゾにやられたくせに！威張んじゃないわよ！！」

「聞いたのか！？あれは不意を打たれたただけだっ」

イザベラの部屋に入り、林檎をテーブルの上に置く。

「正直に言います。白雪には恋人がいたわ。ゾゾっていうね。それに、彼女はマリー様が落ち込むほど可愛くない」

ぼすん、とベッドに座ったら、ひびのはいった鏡が跳ねた。

「可愛くないだとお？」

鏡の中から抗議の声が上がった。

「てきとうなことを言うな、馬鹿魔女」

「いや、本当に。かなりいい子だったけど、別に絶世の美女というわけでは……」

と、言いかけたところで、私は気が付いた。

イザベラって、本物見たことあんの？

「イザベラ、白雪見たことある？」

「もちろん、ある。その鏡でな」

なら、と壁に背中を付けていた王子がベッドに近づいてきた。

「僕達も見せてもらおうよ。僕はまだ見てないし」

……そうだね。白雪はイザベラが美しいという顔ではなかったし。多分鏡のほうが変わんだと思うけど。

「ドリス、白雪を映してくれる？」

鏡を小突けば、その表面はぐにやりと歪んだ。

「こ、これは……！」

「うわ、可愛いな……」

鏡に映っているのは、白雪に似た髪型と服装の、——別人。百歩譲っても白雪だと認めない。美化しすぎて別人になっちゃった感じだよ。

「可愛いだろ？」

鏡の中からドリスの誇らしげな声がした。

「これ白雪じゃないでしょ！」

私が叫ぶと、ドリスは自信満々な声で一言。

「俺にはこう見えるんだよ」

「王子、起きてますか？」

結局、私と王子はカーラ王国王城で一泊することになった。イザベラは私の語る白雪を疑わしそうに聞き、明日にもう一度訪ねる、と言ってた。

私はといえば——眠れなくて、王子の部屋を訪ねている。

「リセミル？」

幸い王子は起きていて、驚いたように私を見た。薄手の寝間着を着てる。眠そうにとろんとした目を擦っている姿は、子供みたい。

「良かった。起きてましたか」

「……どうしたの？眠いんだけど」

「私、枕が変わると眠れないんです」

私の初耳情報に苦笑し、王子は薄く開いた扉を大きく開放した。
「入る？」

あくびをしながら入室を勧める王子。入りますとも。するりと王子の脇を抜けて、部屋に侵入した。

王子は眠っていたらしく、毛布がめくられた形でベッドが乱れていた。

「僕は寝るから。好きなだけいていいよ」

「えー？お話しましょうよ」

ノリの悪い人は嫌われますよ？

ベッドに入ろうとする王子の寝間着を引っ張って阻止して、ベッドに腰掛けた。ぽんぽんと横を叩けば、王子も隣に座ってくれる。

「眠れないのは本当に枕のせいだけ？」

本人による本人の情報をやんわりと否定して、王子はそんなことを言った。

「そうですよ」

「そのわりには……リナルの王城ではどこでもいつでも眠っていたようにけど」

微かな笑いの込められた声に、私は俯いた。

「……白雪嬢のことが気になる？」

「王子は——白雪と結婚したかったですか？」

一年中暖かな気温のこの地方だけど、王子は毛布を引き寄せて私の膝にかけてくれた。

「白雪と結婚してほしかった？」

——当たり前ですよ。

主語が変わっただけなのに、小さな疑問が難問となって返ってきた。

「別に、どうしても白雪と結婚してほしかったわけではありません」
王子が手を伸ばして私の髪に触れた。無造作に束ねられた、魔女の証でもある黒髪。優しく撫でられると、いつのまにか睡魔が近寄ってきた。

「それに——王子の花嫁探しは思いのほか楽しいです。ずっと王子と一緒に王子の花嫁探しをしていたいくらい」

優しく頭を撫でる手が止まった。すっと手は頭から頬に移る。

「王子？」

「リセミル……」

心地好くて、私は力を抜いて王子によりかかった――

「リセミル様ああああーっ!!」

「……っあ!？」

「……はあ」

王子が顔をしかめた。

今の声は、確か……ルタ？

眠気もなくなったので、私は王子から離れて扉を開けた。

「ルタ？」

「ああリセミル様! いてくさいましたかっ!」

弾丸みたいにルタは私に飛び付いてきた。

とても焦っているみたいで、小さな羽をパタパタと揺らしている。

王子も近寄ってきて、不思議そうにルタを見た。

「どうかした？」

ルタはコクコクと頷く。

「白雪嬢が、リセミル様に会いに、城まできているそうなのです」

ルタが言うには、最初に騒ぎ出したのは鏡に閉じ込められたドロスなのとか。彼が鏡の中で白雪を見ると、白雪は家を出たらしい。深夜に家を出るなんて、心も姿も美しい白雪のすることじゃない! と言うんで見守っていると、彼女は王城に来た。夜中に門が開いているわけでもなく、白雪は門番と少し話をしているのだそうだ。

「読唇術で見た。白雪は、リセミルちゃん、と言ったぞ」

鏡の中で、目つきの悪い妖精は堂々と言い切った。

私は黒いワンピースにカーディガンを羽織って、同じく薄着の王

子と共に部屋を出た。ドリスの入った鏡はルタと一緒に部屋に置いていく。

「あら、いかがなさいましたか？」

見回りでしょうね。メイドが私と王子を見て声をかけてきた。

「少し……門まで」

「こんな夜更けに……でしょうか。ご無理はされなくてくださいね。魔女様がいらっしゃるのなら、変な心配は無用でしょうが」

メイドは私の格好と、それから髪と目で私が魔女だと確信すると、肩を竦めて許してくれた。王子のことは、あまりに王族らしくない軽装のせいで見咎められなかった。もしも王子の身分をこのメイドが知ったら、通してくれるはずないもん。

正門は、夜の内に開かないし開けない。なので私達は使用人の使う裏口から外へ出た。

私はたまに使うけど、王子は物珍しそうにキョロキョロと見回している。

「……初めて通ったなあ」

「私はたまに使いますよ。里帰りの後とかに遅刻そうな時便利です」
「間に合ってるみたいと言わないでくれ。毎回遅刻してるだろう？」

裏口から正門へは、近い。城壁を回るようにして歩けば、すぐに正門が見えてくる。

正門前には二人の門番と女の子……白雪が本当にいた。

「うわ、いた！」

「あの子？」

本物の白雪には初めましての王子は、門番の前に立っている白雪を指差して私を見た。

「ええ。あの人です」

こんな夜更けに、どうしたんだろう。

私は小走りで正門に近寄った。

白雪嬢を殺せ！（5）

「それで……だから……なんです」

「はあ！？じゃあ——で、——なんだな？」

「そりゃ酷い！俺なら……ん？」

白雪と門番は……なんか盛り上がっていた。

夜中の、閉まった門の前で顔を見合わせて何かを話している。何となく門に近づく足は遅くなっていき、最終的にはピタッと停止した。王子が私を追い越してスタスタ歩いていった。

「ああ、王子ー！置いてかないで下さいよっ」

「何で止まるの？」

「だって……行きづらい雰囲気がありませんでした！？」

「全然」

王子、空気読んでくださ——ああ、待ってくださいって！

進みたくもなくなったけど置いてきぼりはもっと嫌だ。渋々、私は王子を追った。

チラリと前方、目的地を盗み見ると、門番の一人がこちらを指さしていた！

「なあ、あれ……」

「ん？不審者か？」

「いや中からさ、あーほらほら」

彼らが指差しているのは、王子だった。私は？と考えてから気付く。そうだ、私は真っ黒の服を着てたんだった。そろーり、と王子から離れる。

「どなたです？」

「ああ、僕は……あれ？リセミル？」

「ん？貴方お一人でしょ？」

門番の一人が王子の後ろに回ったところで――、

「わっ！！」

「――！？」

思い切り後ろから脅かせば、門番はいきなり槍を突き付けてきた。

「ひいっ！何すんのよ、危ないなあ！」

「危ないのはそっちだろ、お嬢ちゃん。いきなり驚かすなんて！」

私が言い返そうと口を開くと、パカッと蓋みたいところに手を当てられた。王子だ。

「こんな夜中に、うるさいよ。白雪っていうのは、そのひ……と？」

王子は、白雪の顔を食い入るように見てから瞬きし、再び見つめた。

門番達は「惚れたかぁ？」とか言ってるけど、私には違うと分かる。

……そう、王子は、鏡の中の美しい白雪と実際の白雪の違いに驚いている！……んだと思う多分きつと！！

白雪は、若干照れつつも私を見て笑顔になった。けれど、まるで王子の視線に押さえ付けられているみたいにその場から動かない。

まあ、白雪からしたら初対面の優男に見つめられてる状況だからねえ。仕方がない。

「……あの？」

「あっ、ああ、失礼」

「王子！こちら、白雪Ⅱグレイ男爵令嬢です。――白雪、この人が、私の雇い主のキジュⅡリナル第二王子殿下だよ」

ふうん、と一度頷き、すぐさま白雪は飛び上がるようにして頭を下げた。門番も、つられるようにして頭を下げる。

「は、は初めまして！白雪Ⅱグレイと申します！夜分申し訳ございません！」

勝手に出てきたのは私達なのに……。白雪は礼儀正しいことこの上ない。

王子はと言えば、久しぶりに王子らしい扱いを受けて感動していたらしい。

「話づらいから、頭を上げてくれ」

という声が、少し嬉しそうなもの。

恐々と頭を上げてから、白雪は不思議そうに私に尋ねた。

「ねえ、リセミルちゃん。どうして、私がここにいて分かったの？」

至極もつともな疑問。

「部屋で、教えるよ。……あ、この子、連れてくから」
門番に言えば、彼らは頷いた。

城に戻り、部屋に向かう。白雪はキョロキョロと周りを見渡していた。王子は何も言わない。

白雪に、何があったんだろう？こんな夜更けにお城に訪ねるなんて、彼女らしくない。

「……白雪ちゃん、何かあったの？」

白雪は一瞬だけ迷ったようだった。けど、

「——うん、あったわ」

「え」

「ふられたの。ゾゾに。父や母が持ってきた結婚話を受けろと言われてたわ」

「ゾゾが？」

少し信じがたい話。だって、あのゾゾが。ゾゾなら、反対されても自分の主張を貫きそうなのに。

そんな私を見て、白雪は優しい笑みを見せた。

間もなく、私の部屋に着いた。

人のいない部屋は冷たく、温かみのない雰囲気で満ちていた。外よりも寒い気がして、何となく、腕をさすってしまう。

ドリスの入った鏡とルタが、ベッドにいる。

扉を開いた瞬間、ルタがふよふよと飛んできた。妖精を、白雪が驚いたように見る。

「ね、リセミルちゃん……これ、妖精？」

「そうだよ。それがルタで、こっちの……鏡にいるほうがドリス」
ベッドに置いてある、ひびのはいった鏡を見せれば、白雪は興味津々でそれを見た。

「そのドリスが、白雪の来訪を覚えてくれたの」

「まあ、そうなの……、でも、どうして分かったの？」

鏡を撫でるようにする白雪。

鏡は何も言わない。ただ無機質に、自分を見下ろす白雪を映し出すだけ。

あんなに白雪白雪ってうるさかったドリスが、まさかの無視だよ！？
何度か呼び掛けていた白雪だけど、困惑した表情で私を見た。

「リセミルちゃん……」

「あはは、どうしたんだろ、ドリスー？あんたのアイドルが来たよー？」

しーん。

ルタに、「ドリスは？」と聞いても、「え、いないですか？」と尋ね返された。

「ま、いっか。どうぞ白雪、ベッドにでもソファにでも、座って。話そう。何があったの？」

白雪はベッドに座り、一度恐縮したように王子を見てから、ぽつぽつと話し出した。

「……私は、ゾゾと結婚する。その決心を皆に見せ付けるために、出てきたの。それで、リセミルちゃんがお城にいることを思い出し

て……、迷惑だってことは分かってたんだけど、他に行く場所が思
い付かなくて……」

「——出てきて、ずっとここにいるつもりかな？」

大丈夫だよ、と私が言う前に、王子が苦笑を含ませた声で言った。
いきなり何を言うんですか！

慌てて王子を叩いて黙らせようとすると、王子は軽い動作で私の
手をかわした。

「最終的な道は、かなり限られているよ。そのヴィーラ子爵のもと
に嫁ぐか、もしくは、——そうだな、ゾゾと逃げるか」

「……逃げる……？」

「つまり、駆け落ちだよ」

事もなげに言う王子。呆気にとられる私達。ロマンス小説じゃあ
るまいし。そんなこと、できるわけない。

そうだよね、と白雪を振り仰ぐと、白雪は目を輝かせて王子を見
つめていた。

「ゾゾと、二人きりで……」

「し、白雪？ 駆け落ちなんて、現実的じゃない。そうでしょ？」

「まあもつとも、そのゾゾが君をさらって逃げてくれるか、逃げた
先での衣食住はどうするか。そう考えたら、駆け落ちなんて……リ
セミル？ なんで睨んでくるの？」

なんでって……睨むに決まってるでしょ！

貴方のせいで、白雪がすっかりその気になってるじゃないですか！
私の強い睨みに王子はへらりと笑みを浮かべ、

「とにかく、今日はもう遅い。寝ようか」

と、そう言った。

白雪には、空いている客室を使ってもらった。

勝手に貸しちゃったんだけど……誰も使ってなかったし。大丈夫だよね？

起きたら、一度家に戻る、と白雪は言っていた。ゾゾと話し合う、と。その話し合いが、駆け落ちについてじゃないといいな、と私は思ってる。

さて、私と言えば――。

「ピピピ、ピピピピ」

自分の部屋に戻って寝ただけど、天然の目覚まし時計に起こされた。天然ていうか、鳥よ、鳥！白い、雪のように純白の小さな鳥。それが寝ている私の耳元でピーピー煩く泣きつづける。

「ピピピ、ピピピ」

「……………」

「ピーピーピー！ピピピピピピ」

「だーもう、うるっさいなあ！何だよ！！」
「ピ」

鳥は起き上がった私を満足げに見て、すぐに煙に変わる……魔女の手紙だ。

「けほっ、げほ、けほけほっ！」

朝一に煙を浴びせられた私。咳込む私のすぐそばに、折り畳まれた手紙が落ちた。

それを拾い上げ、読むと。

『城門前で待つ　ゾゾ』

……激しくデジャヴを感じた。

グードス様といいゾゾといい、どうして一行で済まそうとするのか。決闘するんじゃないんだから……。

「……………はあ」

ため息をつき、私は着替えはじめた。

駆け足で城を出て、城門に出るとそこには見知った顔。私の足音で気付いたのか、私を振り向くと、彼……ゾゾは軽く手を挙げた。

「ここに白雪がいるな？」

「う、うん」

頷いてから、思った。

言って良かったのか？

ゾゾは、寝癖のついた頭を軽く振って、「……白雪」と呟いた。

「俺はどうすりゃ良いんだ」

「白雪と話し合いなよ。白雪は、駆け落ちなんて言い出すくらいに思い詰めてるんだ……か、ら……」

言い終わる前に、嫌な予感が全身を包み込んだ。

私を見る、ゾゾのこの真剣な目。

「ぞ、ゾゾ？」

「白雪が言ってるのか？」

ガシッと、肩を捕まれる。

「え？」

「白雪が、俺と駆け落ちしてもいい、って言ってるのか？」

「ん、昨日の夜はね。そう言ってたけど――」

私が言い終えるよりも早く。ゾゾは持っていた箒に飛び乗って城に飛び込んでいった。

「え、えー！？何で私呼ばれたの……？」

慌ててゾゾを追えば、彼は門番に捕らえられていた。

情熱だけでは、門番に勝てなかったらしい。暴れるゾゾを解放してもらうために、昨夜顔見知りとなった門番へ近づいた。

白雪嬢を殺せ！（6）

「放せーっ！白雪……っ！」

門番二人に押さえ付けられ、ゾゾはこれでもかというほど暴れていた。一刻を争う事態でもないし、私は急がずゆっくり近寄った。

…知り合いだと言うのがちょっと恥ずかしい。

「なあ、こいつ不審者かなー？」

「さあ。一応報告すべきだろ……って、あ。お嬢ちゃん」

裏門を使って城を出たので、行きは彼らと会ってない。にこやかに私は手を振った。

ゾゾが抵抗を止め、鬱陶しそうに自分を掴む手を見遣った。

「ども。その人、放してくれない？」

「え？」

門番が私とゾゾを交互に見る。

ゾゾ、私、ゾゾ、私、ゾ……、

「あ、恋人？」

「「違う！！」」

…何故ハモる。

ゾゾ、あんたが言うな！このまま置いて帰ってやろうかつ。

「友達のー、恋人？…と言いますか」

明言を避けてあやふやにムニヤムニヤ言っていると、ゾゾが大声で言いやがる。

「俺は、白雪の、恋人だーっ！こんなんの恋人じゃないっ」

朝っぱらから耳に響く叫び声を間近で浴びてしまった。

「——こんなん……？」

さりげなく失礼なことを言われた。

言い返そうにも、私がゾゾを睨んだ時には彼は門番に囲まれてい

た。ちよつとビビるゾゾ。

「お前があのだい彼氏か！」

「お前、あれじゃ白雪が可哀相だろ？」

「……え？」

今どんな状況なの？といった視線が投げ掛けられる。知らんよ、と言いたいところけど、分かる。

夜中に、白雪に相談されたんだよきつと。だって盛り上がったたもん。

「身分違いとは言え、結婚話を持ち掛けるだなんて……！」

「お前、恋人として最悪だよ！？分かってる！？しかもヴィーラ子爵とか！」

「あ、あの……？」

「何でよりによってヴィーラ子爵かなあ。白雪が逃げるのも頷けるよ」

「お前、俺が白雪なら絶対逃げる。あの子爵に嫁ぐとか！」
え、そんなに？と思うほどのヴィーラ子爵の酷評が続く。

きつとヴィーラ子爵にも良いところあるよ……！
なんて思ってしまった。

「——で、彼氏くん何しに来たの？」

「家に連れ戻しに来たんなら、全力で追い出す」
ようやく悪口を言い尽くしたみたい。

何か白雪の親衛隊みたいになった門番達に、ゾゾは挑むような目で対抗する。

「……連れ戻しに来たんじゃありません！駆け落ちするために来ました……！」

「ちょ、ゾゾ、何言っ、」

「よし！良く言った。それでこそ男だ」

「よし通れ。許可する。早く行って抱きしめてやれよ？」

「……え。何で良い話っぽくなってんの？」

「ゾゾ、待って——」

ガシッ

肩を掴まれた。私の肩を。門番に。

「止めてやるな」

「ああ、そうだよ。祝福してやろうぜ」

「うんうん。ヴィーラ子爵に嫁ぐくらいなら、駆け落ちしたほうが何十倍も幸せだって」

掴まれたきり、抵抗できない私。これ絶対何かの魔法使われてる。だって私、足が動かない。

「……駆け落ちを止めないから、足を解放して」

「絶対？」

「絶対」

頷くと、足が一気に軽くなる。二、三步後ろに下がって、門番を睨んでやった。

「王子に言い付けてやる」

別に白雪が駆け落ちしようとして王子には何の関係もない。ほとんど八つ当たりでそう言えば、門番は気まずそうに顔を見合わせた。

「……ええー」

「いやでも、俺達は悪いことはしていない！だろ？」

「……だよなあ！あのヴィーラ子爵だぜ！？」

逆にそこまで言われるヴィーラ子爵が気になってきたんだけど。絶対通さないとばかりに立ち塞がれ、裏門から帰ってやろうかと思っただけは考えを改めた。

「んじゃさ、ヴィーラ子爵の屋敷の場所教えてよ。どんなもんだか見てくる」

純粹なる興味から、言ってみた。結構気になる。

「ええー。お嬢ちゃん、止めときなよ。ほんと、最悪なオヤジだから」

「悪いことは言わないからさ。あいつ幼女趣味もあるから」

——誰が幼女よ。

粘りに粘って王都にある屋敷の住所を聞き出す。意外にも近く、

徒歩で行ける距離だった。

箒を使わなくて良かったことに安堵し、私は意気揚々と出かけてみた。

——まさかゾゾと会ったら即駆け落ち、ってこともないでしょ。

白雪、常識人だし。

——さてはて。取りあえず、着いた。

当然だけど門はガッチリと閉まっていて、わざわざ呼び鈴を鳴らすような用事も私にはない。

バレないように城に戻って、白雪とゾゾを説得しようかなあ。

最終的に説得するんであれ、その場の感情で駆け落ちなんて駄目だと思うから。

どうしよっかなー、なんて思っていると。

バタンツと突然扉が開いた。絶対に人の力じゃ無理なほどの速さで。慌てて門に身を隠して中を覗き込む。

それと同時に中から同じ速度で、弾かれるようにして二人の人が飛び出してきた。

「ヴィーラ子爵！」

「申し訳ございません、ですが……！」

二人は男女で……年齢的に夫婦かな。開いたままの扉に向かって叫ぶ。

放り出された体制のまま動かないのは、魔法がかかっているからだと思う。

屋敷の中から、人影が。ヴィーラ子爵だと思って凝視すると、思っていたより普通の青年だった。

門番にあそこまで言われる人だとは思えない。

「グレイ男爵。……契約書には、すでにサインされているんですよ？」

……グレイ男爵。

じゃあ、あの人が白雪のお父さん？というか両親！？

確かによく見れば、目元とかそっくり——って、そんな場合じゃない。

「子爵！お願いします、お話させてください……！」

叫ぶグレイ男爵の目は、青年の奥に向いている。なんだ、あの人がヴィーラ子爵じゃないんだ。

「主には取り次ぎません」

「お願いします。白雪の婚約を、解消させてください……！」

白雪の、婚約。やっぱりあの人達が白雪の両親だ。

ヴィーラ子爵のもとに、白雪の両親が。どうして？

——白雪の婚約を解消するために。

「だから無理ですって」

扉が閉められて、グレイ男爵夫妻がうなだれたまま立ち上がる。

「……あの、」

門越しに二人に話し掛けると、目が合った。

綺麗に整えられていたんだらう髪はところどころ解けていて、彼らが必死だったことを表している。

「……白雪の、ご両親……です、よね」

「どなたでしょう……ゾゾに関係ある方かしら」

私の魔女の格好を見ての発言。ゾゾに関係あるって言うのは、間違いない。

「初めまして！白雪の友人の、リセミルⅡツアーネです」

男爵夫妻は顔を見合わせる。

「白雪は、王城にいます。ゾゾが迎えにきてます。もしかしたら駆け落ちしてしまうかもしれないんです」

「城に？それに駆け落ちとは……」

「私がティナール王国第二王子の魔女をしたので、私を頼ってくれたんです」

……説明する気も、ご両親に居場所を教えるつもりもなかったけ

ど。

一度は契約を交わしたとはいえ、それを撤回しようとしていた二人が、白雪を見つけたからといって無理矢理子爵に差し出すことはないと思えた。

「私は、白雪が駆け落ちによって幸せになれるとは思えません。だから、迎えにいったってあげてください。できるでしょ？子爵相手に契約破棄を申し出ることができるなら」

私の言葉の中に刺を感じたのか、母親の頬が赤くなった。恥ずかしい、と思えるのなら上出来かもしれない。

「だが、ヴィーラ子爵に許可をもらわなければ……たとえば一家が揃っていたとしても、この国で生きてはいけない」

貴族は、プライドが高いから。一度オーケーした約束を破られるなんて許さない。ま、この二人の場合自業自得なところもあると思うけど。

それよか私にとっては、絶望した白雪に教えてあげたい。白雪のご両親は、まだやり直せたんだよって。

「……私が何とかしてあげます。だから、迎えに行ってください」

「あなたが……？」

「私は魔女ですよ。多少強引にでも、契約破棄をもぎ取れる。もうすぐ別れる友人へのプレゼントとして、それくらい簡単だから」

……ふっ。今私、すごい格好良くなかった？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5579p/>

童話の世界のとある王国

2011年7月14日05時25分発行